
決戦！！天本博士VS超時空天下人ヒデヨシ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決戦！！天本博士VS超時空天下人ヒデヨシ

【Nコード】

N5783H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

何と大阪城にブラックホール発射基地を造ろうと思いついた天本破天荒博士。ところがその前にあの時空を超えて統治する超時空天下人ヒデヨシが立ちはだかり。天本博士が主人公のはじめての長篇です。

第一章

決戦！！天本博士VS超時空天下人

ヒデヨシ

その時小田切君は大阪にいた。大阪の難波でたこ焼きを食べていた。

「いや、やっぱりたこ焼きは大阪ですよね」

「そうじゃのう」

その隣に白いタキシードに黒いマントのやたらと背の高い異様な老人がいた。靴は白エナメルで尚且つ右手には乗馬鞭のようなものもある。見るからに異様な老人である。

難波は今日も活気に満ちている。なんばグランド花月の前は客で溢れている。その前の本屋にも多くの人が入り出しているのが見える。

「まあ大阪は食べ物がいいからのう」

「ですよね。やっぱり大阪はね」

「しかしじゃ」

ところがここで博士は面白くなさそうな声を出すのだった。

「わしは大阪にただ遊びに来たのではないぞ」

「ああ、そういえばそうだったんでしたっけ」

小田切君はたこ焼きをはふはふと食べながら博士の言葉に応える。

「用事があつてここに来たんですよ、僕達」

「そうじゃ。大阪城じゃ」

言わずと知れた大阪のシンボルである。

「そこに行き大阪城を改造してやるうぞ」

「改造つてどうするんですか？」

またまたとんでもない博士の考えにとりあえず突っ込みを入れる小田切君だった。

「天守閣を改造するんでしたらもう前にやった人がいましたよ」

「安心せよ、それはせんわ」

博士はそれはないと言うのだった。

「それよりも面白いことじゃ」

「面白いこととは？」

「大阪城に巨大な基地を作ってる」

「こんなことを言い出すのだった。」

「巨大なな」

「巨大な基地とは？」

「つまりじゃ。ブラックホールを自由に放てる基地をじゃ」

「作るというのである。」

「作ってやるうぞ」

「またどうしてそんなの作るんですか？」

「面白そうだからじゃ」

相変わらずとんでもない理由で大事をしようという博士であった。

「だからやるのじゃよ」

「はあ、そうですか」

「おい、あれ天本博士ちゃうんか」

「警察呼べ警察」

博士を見て大阪府民達が顔を顰めさせている。博士は大阪においても極めて評判の悪い人物であった。悪いどころではないのだが。

「それではじゃ。たこ焼きを食い終わったらじゃ」

「大阪城ですね」

「うむ。では小田切君よ」

あらためて小田切君に声をかけるのだった。

「大阪城に向かうぞ」

「まだ何か食べたいんですけれど」

しかしここで小田切君はこんなことを言い行こうとはしないのだった。

「駄目ですか？」

「食べたいとは何をじゃ？」

「だから折角大阪に来たんじゃないですか」

「まだたこ焼きを食べながら言う小田切君だった。」

「食い倒れですよ食い倒れ」

「大阪は食い物の街じゃな。確かに」

「だったら食べないと」

意外と食い気に五月蠅い小田切君だった。彼にしては珍しく粘る。

「ほら、たこ焼きの他にもお好み焼きにきつねうどんに名物カレーに夫婦善哉」

「炭水化物ばかりではないのか？」

「そうですか？まあいいじゃないですか」

しかもそれでもいいという態度だった。

「他にも色々があるじゃないですか」

「まあそうじゃな。何しろ大阪じゃ」

「だったら食べないと。お寿司も天麩羅も美味しいですし」

結構色々と好きなものが多いようである。

「大阪に来たんですから」

「ふむ。そうじゃな」

そして博士も珍しく物分りがいいようである。

「わしも少し食べたくなってきたのう」

「ですから行きましようよ」

小田切君は博士が話に乗ってきたと見て早速さらに誘うのだった。

「とりあえずは何処に行きます？」

「まずは金龍ラーメンかのう」

大阪難波の至る場所にあるチェーン店のラーメン屋だ。今二人がいるそのなんばグランド花月のところにもある。他にもあちこちにあるのだ。

第二章

「それを食べてじゃ」

「それと自由軒の名物カレーに夫婦善哉に」

「そういったものを食べてじゃな」

「あとハードロックカフェ行きませんか？」

実に難波の店のことをよく知っていた。

「店の場所変わりましたけれどね」

「とにかくあちこちに行くのじゃな」

「ですから食い倒れですから」

とにかく小田切君の関心はそこにあつた。もっとはっきりと言つてしまえばそこにしか関心がなくなつてしまつていた。やはり食ひ気ばかりである。

「食べましょう。二人と二匹で」

「おっと、やつと思ひ出したな」

「待つてたよ」

ここで今まで二人の足元にそつと誰にも気付かれないように静かにしていたライゾウとタロが言つてきた。この二匹も二人に同行しているのである。

「それじゃあまずラーメンだよな」

「僕達香辛料とか全然平気だから安心していいよ」

「そういえば平気なんだよな」

小田切君も二匹のそうしたところについて言った。

「それも全然だよな」

「おうよ、何を食つても全く平気だよ」

「熱いのも冷たいのもね」

「やつぱりそれも改造の結果かなあ」

「その通りじゃよ」

その改造を施した張本人の言葉である。

「わしを誰じゃと思つておる。知能指数二十万じゃぞ」

「知能指数二十万つて」

「わしの頭脳は常にフル回転しておる」

そういうレベルではないが言うのだった。とりあえず博士の頭脳が常人のそれを遙かに凌駕するとかいうレベルですらなく殆ど特撮の宇宙人レベルなのだった。

「それも完璧にな」

「だからそういうこともできるんですか」

「そうじゃ。簡単なことじゃったぞ」

博士にとっては動物の味覚を変えることなど造作もないことなのだった。

「全くな。それでじゃ」

「はい、今度は何ですか？」

「とりあえず金龍ラーメンじゃな」

話は食い物に戻った。やはり博士の関心もそこにあった。

「それを食べて自由軒に行つてカレーを食べてじゃ」

「後夫婦善哉にも行つて」

「夕食はハードロックカフェじゃな」

「とりあえず食べられるだけ食べますか」

「それで朝は立ち食いでいい店を知つておるしのう」

とにかくあらゆるものが美味しいのが大阪なのである。逆に言えばまずいものを見つける方が難しい。まずければそもそも最初から商売ができないからだ。

「そこに行つてじゃ。とりあえず大阪城に行くのは明日じゃな」

「そうしましょう」

こうしてとりあえずは食道楽に走る彼等だった。その夜はそれこそ腹が張り裂けるまで食べホテルに泊まりそのうえで。朝起きて立ち食いできつねうどんを食べてそのうえでようやくその目的地である大阪城に向かうのだった。

大阪城は長く深い水堀がありそれがまず一行の目に入った。周り

には木々が深く立ち並び林を思わせる。その中央に水色の瓦の勇壮な天守閣がそびえているのだった。周りは石垣に覆われ天守閣の入り口が目の前にある。そこを彼等と同じ観光客達が入り入りしていた。天守閣の最上階から街を眺める人達も見える。

「何かこの天守閣を見るのは久し振りですね」

「そういえばそうじゃな」

一行は今は天守閣のすぐ下にいた。そこからその天守閣を見上げながら話をしていた。

「わしもここに来たのは久し振りじゃよ」

「そうだったんですか」

「思えばここにもよく来たのう」

そうして博士は昔のことを回想しその思い出を語りはじめた。

「この辺りは昔兵器工場があつてのう」

「ああ、戦争中ですよね」

「それで物凄い爆撃を受けたのじゃ」

大阪もかなり手酷く空襲を受けたがその目標の一つだったのだ。

大阪城は天守閣だけが奇跡的に残ったが周りは完全に廃虚になってしまったのだ。

「その前にここで日本軍ともな」

「大立ち回りだったんですね」

「その通りじゃよ」

博士にとっては実に懐かしく気持ちのよい思い出であった。

「帝国陸軍も海軍もわしの好敵手に相応しかった」

「何かこの博士ってあちこちに敵いるよな」

「そうだよな」

この時も二人の足元にいるライゾウとタロが話す。

第三章

「何かそれこそ世界中に」

「確かに」

「なくなってしまったのが残念じゃ。自衛隊はどうも軟弱でいかん」
「軟弱以前にどれだけ迷惑かけてきてるんですか」

小田切君は常識の立場に立って博士に突っ込みを入れた。
「そもそも」

「迷惑？何じゃその言葉は」

だが博士は彼の問いにこんな言葉で返すのだった。

「聞いたことがないのじゃが」

「って博士文学博士でしょうが」

「文学博士でも知らんもんは知らん」

なおこの博士はこの他にも様々な博士号を持っている。一体幾つあるのかわからない程だ。

「それはな」

「本当に御存知ないんですか？」

「知らんものは知らん」

取り付く島もない返答だった。

「そんな言葉はのう」

「そうなんですか」

「とにかくじゃよ」

こう話したうえでまた自分のことを述べる博士であった。

「大阪城にブラックホール発射基地を作りじゃ」

「そもそもそれで何するつもりなんですか？」

「そこから何処かの惑星なり恒星を無差別攻撃じゃ」
「やはり碌でもないことを考えているのだった。」

「どうじゃ。面白いじゃろ」

「面白くないですよ」

小田切君は真顔で博士に言い返した。

「結局そういうことするんですか」

「そうじゃ。まあ大したことはない」

博士にとつてではある。

「それはのう」

「惑星や恒星を無差別攻撃することは大したことじゃないんですか」
「んっ？何か悪いか？」

博士の趣味の一つに無差別攻撃もある。とりあえず目に入った気に入らない暴力団の事務所や暴走族の集會に怪人を殴り込ませることも日常茶飯事である。

「いつものことじゃろうが」

「まあそうですけれどね」

本当にいつものことだから始末が悪い。

「じゃあやっぱり」

「そうじゃ。早速はじめるぞ」

こうして早速恐怖の基地開発に取り掛かる。しかしここで。突如として一行の前に謎の人物が姿を現わしたのだった。

猿に似た顔の小柄な男だった。年齢は丁度還暦位か。目は大きく丸い。そして頬がこけている。小柄で一見すると貧弱な身体をしている。その小柄さは小学校高学年程度だ。

そしてその小柄な身体を礼服に包んでいる。この礼服はそのまま平安時代のものでありう白と銀の豪華なものだ。帽子は黒で顔はあまり品があるとは言えないが何故か恐ろしいまでの威圧感を醸し出している、そうした不思議な男であった。

「あれっ、この人って」

「どっかで見たような」

ライゾウとタロがその男を見てまず言った。

「ええと、けれど何処で」

「何処で会ったかな」

「あの、博士」

小田切君は男を見てまずはその目を思いきり顰めさせた。そうしてそのうえで博士に対して言うのであった。

「この人って確か」

「そうじゃ、ヒデヨシじゃ」

博士はその男の名を小田切君達に告げた。

「あれはな。ヒデヨシなのじゃよ」

「ヒデヨシってやっぱり」

小田切君はその名前を聞いてまた言った。

「あれですよね。豊臣秀吉」

「超時空天下人ヒデヨシじゃ」

博士はここでまた奇想天外な名前を出した。

「それがあの男の名じゃよ」

「超時空天下人ヒデヨシ!？」

「如何にも」

そのヒデヨシの方から名乗ってきた。名乗るとそれだけで凄まじいばかりの、大阪どころか日本全土まで覆ってしまうような凄まじい気を放つ。

「この世の全ての時空を支配する者、それがわしじゃ」

「初耳ですが」

小田切君はそれを聞いてまず言った。

「何ですか、その全ての時空を支配するって」

「超時空天下人ヒデヨシは全世界のありとあらゆるものを支配する存在じゃ」

博士はその小田切君にこう説明した。

「時空を自由に超えることができるのじゃよ」

「殆ど人間じゃないですね」

「人でありながら人の能力を超越した超人」

博士はまた語った。

「それこそがあの男よ」

「何か博士と同じタイプの間人なんですね」

「博士よ、暫く振りだな」

ヒデヨシはまた博士に対して言ってきた。やはりその全身からは凄まじい気を放ち続けている。それは力は山を抜き気は世を覆うどころではなかった。

「元氣そつで何よりだ」

「御主ものう」

博士は不敵に笑ってヒデヨシに返した。

「どうやらまた時空を超えて活躍しておったようじゃな」

「うむ。七千万年前に行き恐竜の世界を治めた」

ヒデヨシは言うのだった。

「それで歴史を改変させてみたのじゃ」

「本当に人間なんですか？」

小田切君はあからさまに怪しむ顔でヒデヨシを左手で指差しつつ博士に問うた。

「何かやってることが滅茶苦茶なんですけれど」

「ヒデヨシを甘くみるでない」

しかし博士はここでそのヒデヨシを見据えながら小田切君に告げるのだった。

「あの男はかつて世界最大の文明を完全に根絶したのじゃ」

「完全にですか」

「そうじゃ。ユーラシア大陸から北米にまで影響を及ぼし半万年の歴史を持つ」

いきなり途方もないスケールの文明の話になる。

「朝鮮半島の文明を根絶してしまったのじゃ」

「そんな文明あったんですか？」

小田切君は常識の範疇で博士に尋ねた。

第四章

「聞いたこともないですけどね」

「向こうの歴史ではそうなっております」

しかし博士はこう小田切君に答えるのだった。

「そして禿山だらけにし三百年間ペンペン草も生えない程焼き尽くし素晴らしい建築物を全て跡形もなく破壊し尽くし」

話のスケールはどんどん大きくなっていく。

「そして偉大な歴史を書き残した歴史書も全て焼き尽くし人類の進歩に大きく貢献した技術も破壊し尽し技術者を根こそぎ日本に拉致し」

「何か東映の特撮ものの悪役より凄いですね」

最早その域すら凌駕してしまっていた。

「戦では常に大勝し敵を寄せ付けず戦の余興に半島の象徴である虎をはじめとした多くの野生生物を狩り尽くし嘘の歴史書や劣った技術を置いてその朝鮮文明を根絶したのじゃよ」

「ええと、何か滅茶苦茶強過ぎませんか？」

小田切君はここまで話を聞いてとりあえずそれが現実の世界であるとしたうえで博士に問うた。

「それって」

「コルテス？ピサロ？甘い甘い」

悪名高き中南米のコンキレスタドル達だ。彼等が根絶した文明は今だにどれだけのものではあつたのかよくはわかっていない。そこまで徹底的に破壊してしまったのだ。

「あのヒデヨシの前にはな」

「ですよ。まさに化け物です」

「そうじゃ、化け物じゃ」

ヒデヨシを差しての言葉であるのは言うまでもない。

「それがあの男なのじゃよ」

「そんなに凄い人だったんですか、太閤様って」

小田切君もはじめて知る事実であった。

「歴史の教科書で読むよりずっと偉大ですね」

「歴史の教科書は普通に嘘を書くぞ」

博士はこのことを小田切君に告げた。

「それも平気でのう」

「まあ最近の学者やマスコミ関係者は全然信用できませんけれどね
実右派小田切君はマスコミがあまり好きではない。

「特に夜の十時や十一時から始まるニュース番組は」

「そんなものを観る位ならドラマでも観ていけばよい」

博士にしるこ言うのであった。

「テレビは楽しんで観るものじゃよ」

「それはその通りですね」

「そうじゃ。まあそれよりもじゃ」

「はい、あの人がすけれど」

ここで話がそのヒデオシの方に戻るのだった。

「それで何でこの時代に蘇ってきたんですか？」

「蘇ってはおらんぞ」

ところが博士はこう答えるのだった。

「時空を超えて来ておるのじゃよ」

「だから超時空天下人なんですか」

今ここでわかったその通称の由来である。

「それですか」

「そうじゃ。あの男は時空を自在に移動することができる」

とりあえずまともな人間の能力ではない。

「確実にのう」

「そこまで物凄い人なんですか」

「一応一五九八年に死んだことになっておるが実はこうして時空を
自由自在に行き来できるから」

話はどんどん大きくなっていくのだった。

「実質的には不老不死なのじゃよ」

「不老不死ですか」

「わしは不滅じゃ」

そのヒデヨシの方からの言葉である。

「決して死ぬことはないのじゃ」

「それはわかりましたけれど」

小田切君は不死身とかそういうことに関しては博士という実例を知っているのととりあえずは納得した。博士にしる宇宙開闢の頃から生きているのである。

「それでどうして大阪城に戻っておられるんですか？」

「おかしなことを言うのう」

しかしヒデヨシは小田切君にこう返すのだった。

「わしが大阪城にいて悪いのか？」

「あつ、そつえば」

小田切君もヒデヨシに言われてふと気付いたのだった。

「ここつて貴方のお家でしたよね」

「左様。大阪城は我が居城」

そうなのである。大阪城は他でもないこのヒデヨシの居城だ。彼がその持てる力を尽くして築城した天下の名城なのである。難攻不落とさえ謳われていた。

「この城にいて不自然ではあるまい」

「そうですね。それは確かに」

小田切君も博士の言葉に頷く。

「じゃあ特に驚くことはないか」

「しかし。天本博士よ」

「何じゃ？我が強敵よ」

この場合強敵と書いて『とも』と読む。

「そのわしの城を勝手に基地に改造しようとはいい度胸をしておるのう」

「悪いか？」

「悪いに決まっております」
「トデヨシの側から見ればまさにその通りである。」

第五章

「わしの居城を勝手に改造しようなどと。許せる筈がなかるう」
「ではどうするのじゃ？」

博士は平気な顔でまたヒデヨシに言い返す。

「戦うつもりだともいうのか？」

「その通りだ。今から御主達にはだ」

「御主達っていうと」

「僕達もだよ」

ライゾウとタロは今のヒデヨシの言葉を聞いて顔を見合わせ合つ。

「やっぱりそうだよ」

「何かまた巻き添え受けるみたいだけれど」

「では。覚悟はよいな」

実際にヒデヨシは博士だけでなく小田切君や二匹も見て言ってきた。
「今から別の時代に行ってもらおう」

「別の時代か。ふむ」

博士はそれを聞いても平気な顔であった。

「それでは久し振りに時空旅行を楽しむとするか」

「楽しむって博士」

小田切君は何処か別の時代に行くと言っていて慌てていた。だからこそ到って平気な博士に対して突っ込まずにはいられなかった。

「そんな状況じゃないですよ、これって」

「安心せい。わしに不可能はない」

博士はこの中でも平然としている。その中で博士達の周りを暗黒の空間が囲んでいた。

「おい旦那、これってよ」

「タイムホールだね」

ライゾウとタロも当然ながらその空間を前にしている。彼等は今

まさにその中に消えんとしている。

「これって間違いなく」

「じゃあ今から何処の時代に行くんだろ」

「あらゆる時空を彷徨いその中で朽ち果てるのだ」

ヒデオシはその鋭い目を光らせて博士達に告げる。

「わしのこの時空流しの術によつてな」

「だから何で僕達まで流されなくちゃいけないんだ」

「そんなことを気にすることはないぞ」

博士は相変わらず冷静なものである。まるでこれからピクニックに行くかのよう。

「さて、それではどの時代で我が偉大なる発明を見せられるかのう」

この言葉を最後に皆その黒い空間に飲み込まれる。そうしてそのうえで何処かの時代に送り込まれていく。一行は黒い空間の中に入ったかと思つたがそれは一瞬のことである場所に放り出された。そこは。

「！？ここつて」

「何だ？この馬鹿でかい宮殿は」

「どれだけお金がかかつてるんだらう」

小田切君達はとりあえず目の前に出て来たその宮殿を見て言う。

見ればそれは物々しくそのうえで桁外れに大きい。小田切君がその宮殿を見て言った。

「ああ、これベルサイユ宮殿だよ」

「ベルサイユ宮殿！？」

「ここがなんだ」

「しかもあの格好は」

続いて宮殿の周りを行き来する人々を見て言うのだった。

「昔の貴族の服装だね」

「ああ、そつえばあの髪型も」

「よく漫画で見るよ」

タロとライゾウは博士のその言葉に頷いた。彼等は漫画もよく読

むのである。

「ベルサイユの薔薇とかで」

「じゃあここはあの頃のフランスなんだ」

「そのようじゃな」

やはり博士もいた。彼はその周囲を見回してゆっくりと前に出た。

「ここはのう」

「何かえらい時代に来ちゃいましたね」

小田切君はここに至ってようやく考えをまとめこう呟いた。

「すぐに革命とかに巻き込まれるんじゃ」

「だとしたらそれはそれで面白いことじゃな」

博士にとつて革命もまたイベントの一つでしかないのだった。

「わしを勘違いしてギロチンに送るうものならじゃ」

「どうするんですか？」

「その革命家共全員あの世送りじゃ」

からからと大笑いしながらの言葉だった。

「逆に全員生体実験でまず首を回転式電動ノコギリで切断してやる
わい」

「その場合麻酔はするんですか？」

「麻酔？わしは生体実験や手術ではそんなものは一切使わんぞ」

これが博士の流儀である。

「さもなければ痛みや恐怖で苦しみ怯える姿を見ることもできんし
あの断末魔の素晴らしい絶叫を聞くこともできんじゃろうが。何が

面白いのじゃ」

「それがなければ何の意味もないんですね」

「何のやる価値もないわ」

実にわかり易い博士の趣味であった。

「麻酔なぞを使つてはな」

「よくわかりました。それでは」

「わかつてくれればよい。とにかくわしを革命家とみなせばそれで
終わりじゃ」

「それは絶対にないよな」

「ねえ」

しかし二人の足元でまたライゾウとタロが話すのだった。

第六章

「こんなあからさまに怪しいお爺さんをねえ」

「まあ不審者と思われるわバスチーユ送りかな」

「バスチーユか。それもよい」

監獄さえ博士にはどうということはないのである。

「即座に完全に爆破してやるわ」

「ただ爆破するだけですか？」

「無論それで終わらせるつもりはない」

博士はそれで終わるような人間ではない。

「エンペライザーかカイザージョーを召還してそのうえで革命家共を皆殺しにしてやるわ。わしに楯突いた報いを思い知らせてやるわ」

「この時代にあんなの召還できるんですか？」

「できるぞ。ほれ」

言いながらまた懐から何かを出してきた。見ればそれは携帯電話に非常によく似ている。ライゾウとタロがそれを見てまた話すのだった。

「相変わらず時代考証とか全然考えない人だよなあ」

「フランス革命の時代に携帯電話なんて」

「無論これはただの携帯電話ではない」

一応携帯にも使えるようである。

「ただの電話ではのう」

「じゃあ本来の時代にも通じるんですね」

「うむ。では早速呼ぶぞ」

こうしていきなり巨大ロボットをよりによってこの時代に召還するのであった。そうして召還されたのはカイザージョーであった。ベルサイユ宮殿にいきなり場違いなロボットが姿を現わした。

「わっ、何だあれは！」

「悪魔か！」

「銀色の悪魔だ！」

貴族達だけでなくみらびやかな軍服の近衛兵達までもがカイザー・ジヨーを見て驚きの声をあげる。そうして口々に叫びながらその巨大な姿を見上げるのだった。

「悪魔が陛下に害を為しに来たぞ！」

「撃て！撃て！」

「大砲を持って来い！」

「何じゃ、悪魔と申すか」

博士は彼等の言葉を聞いていささか残念そうに呟く。

「わしの発明した偉大なカイザー・ジヨーをそんな陳腐なものとか」

「この時代の人じゃ当たり前なんじゃないんですか？」

小田切君がその博士に突っ込みを入れる。貴族達も兵士達もその間に剣を抜き銃や大砲をカイザー・ジヨーに向けている。そうして今にも攻撃を仕掛けようとしている。

「よし、今だ！」

「撃て！」

「銀の弾丸も持って来たぞ！」

「何じゃ、そんなものでカイザー・ジヨーを倒せると思っているのか」

博士はその様子を見てやはりいささか不満そうである。

「愚かな。そんなもので倒せる筈もなかるう」

「ですから悪魔と思われてますから」

小田切君の突込みが続く。

「これも当然ですよ」

「わしは常識や当然といったものが嫌いなものじゃ」

流星は博士であった。

「さて、それではじゃ」

「で、どうするんですか？」

「発明したものは使うものじゃ」

これは言うまでもないことであるが博士が言うところの上なく物騒なものに聞こえる。博士が何かをすればそれだけで何もかもが物騒

になつてしまつう。

「違うか？」

「そうですね、こんな場所でカイザージョー使つたら」

小田切君が気にしているのはそのことだつた。

「ベルサイユ宮殿が」

「ああ、そんなものはどうでもよい」

カイザージョーはベルサイユ宮殿のバックにいるのだ。壮麗かつ巨大な宮殿の真後ろに白銀のロボットがいる姿は実にシニールなものであつた。

「宮殿の一つや二つはのう」

「けれどベルサイユ宮殿つていつたら」

小田切君は顔を顰めさせて博士にまた言つ。

「二百年の歳月をかけてそのうえでやつと完成したんですよ。人手も費用もかなりかかつてあれこれ手を入れて建築していつた代物ですけれど」

「ふむ。それでトイレがなかつたんじゃない」

博士はこのベルサイユ宮殿におけるあまりにも有名な話を指摘した。

「設計者は何を見落としていたんじゃないやろうな」

「それで宮殿の端とかお庭はそれこそ排泄物まみれだつたんですよ」

「そうじゃ。汚物の消毒じゃ」

殆ど何処かの世紀末漫画のモヒカンの台詞であつた。

「あの宮殿を全部焼くかそれか絶対零度で凍らせて消毒するかじゃない」

「それって結局宮殿全壊じゃないですか」

「ふむ、そういえばそうか」

言われてまたしてもやつと気付いたような顔を見せる。

「まあそれもよい」

「よくないですよ。そんなことしたら」

二人が話しているその間に馬に引かれた大砲が幾つもやって来た。そうしてそれぞれ配備されそのうえでいよいよ撃たれようとしていた。

「撃ち方はじめ！」

「あの悪魔を倒せ！」

「陛下を御護りしろ！」

「その陛下がもうちょっとしたらギロチンじゃな」

相変わらず博士は実に落ち着いている。

第七章

「まあそれが歴史じゃがな」

「で、どうするんですか？」

小田切君はいよいよ戦闘がはじまりそうなので気が気でない。

「このままだと本当にベルサイユ壊すんですよね」

「形あるもの何時かは必ず壊れる」

博士が言つとんでもない暴言になる台詞であった。

「それだけじゃ」

「それだけですか」

「うむ、何も悲しむことはない」

博士は今にもそのカイザージョーを動かそうとしている。そうなればベルサイユ宮殿がどうなってしまうかは最早自明の理であった。

「それではじゃ」

「って博士、そんなことしたら」

小田切君も今回ばかりは顔を顰めさせて止めようとする。

「歴史が変わってしまいますよ」

「あんなちっぽけな宮殿一つ壊してか」

「ちっぽけってベルサイユ宮殿がですか」

思わず抗議してしまつた小田切君だつた。

「何処がなんですか、ベルサイユの」

「下らんものじゃ」

博士は主観のみの言葉をなおも続ける。

「あんな派手派手だけのものはな」

「それで壊すんですか」

「そうじゃ。まあ歴史なんぞ後でどうとでも訂正されておるわ」

カイザージョーへの攻撃が行われている。しかしこの時代のものが巨大ロボットに効果がある筈もない。全く平気なものでその場に立ち続けている。

「そんなものはな」

「やっぱりこの博士って悪役だよな」

「完璧なマッドサイエンティストだね」

ライゾウとタロは今更な言葉を出す。

「平気で何でも破壊するし」

「もう何を言っても無駄だしね」

「では行くがよいカイザージョーよ」

彼はまさに攻撃を仕掛けようとしている。その携帯式の操縦機を動かせばすぐにであった。ベルサイユ宮殿が跡形もなくなるのが。

そして今遂に操縦がはじまった。そうして動きはじめたカイザージョー。それでまずは軍隊を蹴散らそうとする。しかしそれより前にであった。

「待ただぎゃ、ちょっと待ただぎゃ！」

「日本語!？」

「しかもこれって」

ライゾウとタロは突然聞こえてきた言葉を聞いて声をあげた。

「名古屋弁だよな」

「うん、間違いないね」

「黙って見ておいたら何ちゆうことをするんだぎゃ!だからこの博士は放つてはおけんがや!」

「あれっ、この声って」

小田切君もその声に気付いたのだった。

「あれじゃないんですか。さっきの」

「ふむ、ヒデヨシじゃな」

「左様」

そしてそのヒデヨシが姿を現わしたのだった。彼は宙に浮かびそのうえでカイザージョーと対峙していた。

「何処かの世界に送ればそれで少しはましになると思ったがのう」

「あの人博士と付き合いが長いのに全然わかってないよな」

「だよ。絶対にましになんかなれないのに」

またライゾウとタロが話をするのだった。

「それこそ南極とか宇宙空間に放り込まれても帰って来るのに」

「何で別の時代の別の国に送り込んだ位でましになるのかな」

「思えばこうして御主を別の時代の何処かの国に送り込んだのは何百回目か」

ヒデオシはカイザージョーと対峙したまま博士に告げる。その声だけを博士にかけそのうえで巨大ロボットと対峙を続けているのであった。

「それでもやることは変わらんようじゃな」

「わしを誰だと思っておる」

博士は相変わらず平然としている。

「天本破天荒じゃぞ」

「そうだったのう。わしの宿敵であるな」

「それだけ長いお付き合いなんですか」

小田切君は二人の関係をあらためて知るのであった。知ったところでどうにかなるものでもないが。

「そんなに」

「そうじゃ。わしが気に入らぬ輩を成敗しようとしたり好かぬ建築物を破壊しようとしたりするといつもわしの前にやって来るのじゃ」

「つまり正義の味方ってわけだな」

「そうだね」

ライゾウもタロも博士を完全に悪役と認識していた。

「流石は超時空天下人だよな」

「全くだよ」

「ベルサイユ宮殿を破壊させはせぬ」

ヒデオシはその礼服装姿で宙に漂い続けている。

「ここでカイザージョーを止めるぞ。覚悟するのじゃ」

「貴様にこのカイザージョーを止めることができるのか？」

博士は何時の間にかカイザージョーの左肩のところにワープして

いた。そうしてそのついで黒いマンントをたなびかせ立っているのだ
った。

第八章

「何だあの怪しい老人は！」

「魔王か！」

フランス近衛兵達が博士を見てまた叫ぶ。

「悪魔を操っているぞ！」

「では魔術師か！」

「そういえば博士って黒魔術も使えるんだっけ」

小田切君は博士とヒデヨシの対峙を見ながらふと呟いたのだった。

「そうした魔術も」

「それでも黒魔術なんだね」

夕口はそこに突っ込みを入れた。

「白魔術じゃなくて」

「まああの博士が白魔術なんて使うわけないしな」

ライゾウもこのことは非常によくわかっていた。

「黒に決まってるさ、魔術を使うんならさ」

「けれどどうなるんだろう」

小田切君は顔を見上げて対峙する二人の異常能力者達を見てまた呟いた。

「この対決って一体」

「さあ。まあとぼつちりで周りがえらいことになりそうだけれど」

「しかもフランス軍の人達逃げようとしないうし」

「あの怪しい猿のような男も撃て！」

「あれも悪魔に決まっている！」

「誰が猿だかや誰が！」

しかしヒデヨシはそれを聞いてまた怒るのだった。今度はフランス軍に対して。

「ええい、天誅だぎゃ！」

「うわあああああ——————っ！」

何と持っている刀を抜いてそれを一閃させると雷が落ちた。それによりフランス軍の将兵達も貴族達も撃つたのだった。皆それにより黒焦げになってしまった。

「うう、何だこの雷は」

「あの男、やはり人間ではないのか」

「わしはただの人間ではない」

黒焦げになりながらもそれでも生きている将兵達も貴族達も呻きながら言うのだった。

「超時空天下人ヒデオシじゃぞ」

「ふむ。落雷の術か」

博士はヒデオシのその落雷を見て言うのだった。

「相変わらず見事な術じゃのう」

「こんなものは術でも何でもない」

落雷を放ったヒデオシは平然としたものであった。

「この程度。小指を動かした程度じゃ」

「左様か」

「貴様を倒すには小指では不足なのはわかっておる」

ヒデオシの声が強いものになった。

「行くぞ、よいな」

「来るがいい」

博士もまた受けて立つ。こうして今戦いがはじまろうとしていた。カイザージョーがいきなり両手を前に出す。それと共に博士が叫ぶ。

「行けつ、カイザージョー！」

この言葉と共にカイザージョーの両手の指から雷が放たれる。それでヒデオシを倒そうとする。

「その雷で太閤を倒すのじゃ！」

「やはり悪魔だ！」

「雷を出したぞ！」

それを見たフランス軍人達がまた叫ぶ。

「あの銀色の巨人、何という悪魔なのだ」

「そしてあの白衣に黒マントの老人は」

当然博士も見ているのだった。

「やはり魔王か」

「だが。あの猿面の男」

彼等はまだ懲りてはいなかった。黒焦げになったままであっても。

「魔王と対峙するとは」

「天使なのか？猿顔の天使か」

「ああ、それは違いますよ」

小田切君が出て来て彼等に告げた。

「それはね」

「おやつ、貴殿は」

「見たところ東洋人のようだが」

「はい、日本から来ました」

こう彼等に答えるのだった。その間ライゾウやタロは言葉を出すことはない。ここで人間の言葉を出せば大騒動になるのがわかっていたからだ。

「旅行に」

「あれっ、あの国は鎖国していなかったか？」

「そうだったな、確か」

貴族達が日本と聞いて述べた。

「それでどうして我が国に来れたのだ？」

「一体どうして」

「実は將軍様から特別に許しを得まして」

そういうことになってしまって話を強引に進める小田切君だった。

第九章

「それでなんですよ」

「ふむ、許可を得てか」

「それでなのか」

「そうです。それでですね」

小田切君は彼等がとりあえず納得したと見てまた言葉を続ける。

「あの人は確かに悪い人じゃないですよ」

「悪い人じゃないのか」

「あの猿面の男は」

「猿って言うと怒りますから」

このことは重ね重ね注意するのだった。フランス軍の将兵達に対して。

「それは注意して下さい」

「そうか、それはわかった」

「それではな」

彼等もその言葉は受けるのだった。とりあえずは。

「では我々はあの銀色の悪魔を倒せばいいのだな」

「それで」

「あつ、それは止めた方がいいです」

小田切君はそれも止めた。

「というかこの戦いは傍観された方がいいです」

「黙って見いろというのか？」

「だが陛下の安全が」

この辺りは流石であった伊達に軍人、しかも近衛軍にいるわけはなかった。近衛軍は王を護ることがその責務に他ならないからである。

「そつだ、それを何とかしなければ」

「我等の誇りにかけて」

「それだっただけですね」

小田切君はここで機転を利かせてきたのだった。

「宮殿を御護りすればいいんですよ」

「このベルサイユ宮殿をか」

「護れと」

「国王は確かこの時代は」

少し考える。そうしてすぐに名前を思い出したのだった。

「ルイ十六世陛下でしたね」

「そう、その方だ」

「よく知っているな」

「それはもう」

小田切君はここでは彼等に対して笑って述べるのだった。

「漫画にも出て来ますからね。ベルサイユの薔薇に」

「漫画!？」

「ベルサイユの薔薇!？」

近衛兵達は漫画や兵士という言葉に眉を顰めさせた。

「何だそれは」

「何なのだ？」

「あつ、何でもないです」

ここでも誤魔化す破目になってしまった。しかし小田切君は平気な顔でやり取りを続ける。この辺りは中々肝が座っていると見える。

「まあとにかくですね。王様を御護りするには」

「宮殿か」

「陛下のおられる宮殿を」

「はい、そうです」

今度は笑顔で彼等に告げるのだった。

「それでいいですから」

「わかった、それではな」

「その様にしよう」

こうして彼等は宮殿の護りに入った。そしてそれが結果として彼等の身を護ることになった。丁度彼等がいたそこにカイザージョーが放ちヒデヨシが右手を一閃させて弾き返したその雷が落ちたのである。

「危ないところだったな」

「もう少しでまた黒焦げになるところだったよ」

ライゾウとタロが雷が落ちたその場所を見てそれぞれ言った。

「あと少しだったよ」

「よかったよかった」

「そうだね。けれど君達もよく言葉を出さないでいてくれたよ」

小田切君はこのことを素直に喜んでいた。

「おかげで僕達もあまり怪しまれずに済んだよ」

「まあその辺りはよ」

「僕達もわかってるから」

こう小田切君に答える二匹であった。

「慣れてるから大丈夫さ」

「任せておいてよ」

「頼むよ。さて、それはいいけれど」

あらためて上を見る小田切君だった。そこでは相変わらず博士とヒデヨシが激しい攻防を繰り返している。

「何か物凄いことになってるね」

「あのカイザージョーと互角に渡り合うなんてな」

「やっぱり。超時空天下人は違うね」

「全くだよ」

小田切君と二匹は上を見上げながら話す。その間にも攻防が続いている。

カイザージョーはその巨大な両腕を振り回しヒデヨシを叩き落そうとする。しかしヒデヨシは宙を飛びそれを何なくかわすのであった。

「無駄じゃ、無駄じゃー!」

「かわすというのだな」

「その通りだぎゃー！」

また尾張弁が入っているヒデヨシだった。

「わしをその程度の攻撃で倒せると思ってるだぎゃー！」

「確かにのう」

博士もまたヒデヨシのその言葉に頷くのだった。カイザージョーの左肩で。

「この程度で貴様を倒せるとは思ってはおらぬ」

「見くびってはおらんのじゃな」

「わしは相手を見くびることはない」

博士の長所ではある。

「決してのう」

「それはよいとしよう」

ヒデヨシもそれは認める。

「しかしじゃ」

「ふむ。やはり何か言いたいのじゃな」

「貴様のやることは許せん」

ここでヒデヨシのその言葉は強いものになった。

「その遊びのままに破壊の限りを尽くすその行動がな」

「何じゃ、そんなことが」

なお博士にとって何かを破壊するということは何でもないことである。それこそその辺りに転がっている石を蹴るようなものである。本当に何でもないことなのだ。

「その程度か」

「この宮殿を破壊するのモカ」

「だから言っておろう。形あるもの何時かは必ず壊れる」

また言う博士だった。

第十章

「気にすることはない」

「だがこの宮殿は多くの民達の苦労もあり金も時もかかっておる」
ベルサイユ宮殿の建築はかなりの難工事であった。しかも費用は莫大なものであった。ルイ十四世はここにオレンジの木を植えようとしてそれもまた出費になってしまっていたのだ。そして完成までに二百年かかった。やはり途方もないものであるのだ。

「それを壊させるわけにはいかん」

「あれっ、太閤様っていい人？」

「にしか見えないよね」

タロとライゾウは二人のやり取りを聞いてこう思うのだった。

「何か話聞いてたらよ」

「博士が悪役なのは当然だけれど」

これだけは確かなことだった。博士が悪役なのは。

「教科書とかだと暴君に書かれてたりするけれど」

「実際は違うのかな」

「そうかもね」

彼等に答えたのはやはり小田切君であった。

「何度も言うけれど教科書は嘘も多いから」

「教科書に嘘多いってまづいんじゃないのかい？」

「そうだよ。子供達は皆教科書を信じるものなのに」

「そこに嘘を入れて洗脳する方法もあるんだよ」

小田切君の言う現実はかなり暗いものであった。何が一番暗いかというと小田切君の言っていることが紛れもない真実だからである。

「それは政府がするよりも」

「あれっ、所謂国家権力じゃないのかよ」

「そうじゃないの」

「特定の思想を持った教科書の製作者や協力者が問題なんだ」

小田切君は彼等こそが問題だというのである。

「そうした人達がね。教科書に変な思想を持ち込むから」

「ああ、そういえば侵略を進出と書き換えたとか」

「そんな事件があったんだっただね。虚報だったけれど」

そうした事件が実際にあった。それにより日本が被った実害は途方もないものだった。この虚報を最も大々的に報道したある新聞社は何の謝罪もしていない。それどころかそれ以降も何度も意図的と思えない虚報を流し続けている。そういうこともあるのだ。

「それから教科書が変になったんだよ」

「まあさ、学校の先生とかっておかしな人多いけれどね」

「実際のところね」

彼等もこのことは知ってはいた。

「つていうか人格障害者が異常に多いってどうか」

「変なイデオロギーに染まってる人も多いんだ」

「それもかなりね」

小田切君の返答はこれまで以上に暗いものとなっていた。

「なってるんだよ、だからさ」

「教科書は信用できないのかよ」

「それでなんだ」

「そういうことなんだ。まあ僕もさつき博士に言われたけれどね」

ぼやいたような言葉を出しながらその博士を見上げての言葉だ。

「教科書はそのまま鵜呑みにしたら危険な場合もあるんだ」

「そうなのかよ」

「難しいね、その辺りは」

「難しいよ、本当に」

小田切君の言葉は続く。

「ちゃんと考えていかないとね」

「それじゃあ太閤様はやっぱいい人なのかよ」

「どうなの？その辺りは」

「まあ博士よりはずっといい人だと思うよ」

これまたかなり身も蓋もない言葉である。

「奴隷にされていた日本人をすぐに買い戻したり普請に徴用したら大盤振る舞いだったし庶民を気軽に茶会や花見に招いたりしてたからね」

「へえ、やっぱりいい人だよな」

「そんなことしてたんだ」

「後は戦死者を敵味方分け隔てなく供養したり」

朝鮮戦役のことである。あの耳塚はそうしたもののであるのだ、実際は。

「そういうことをしてきたんだよ」

「じゃあ残酷なこともしたけれど」

「いいことも一杯した人なんだ」

「そういうこと」

小田切君が言いたいのはそういうことであつた。

「間違つても博士みたいに気に入らないってだけで人を生体実験にかけたり改造人間にしたりなんかはしないから」

「だよなあ。この前なんか人間爆弾なんかやってたし」

「その人達をならず者国家の関連施設に送り込んで爆発させたり」
街の柄の悪いチーマー達を捕まえて行ったのである。

「そういうことなんて朝飯前だからね」

「というか普通だし」

「あの人は流石にそういうことはしないからね」

小田切君は今度はヒデオシを見ていた。カイザージョーが連続して放つ無数のミサイルを両手から放ったオーラバリアで全て防いでいた。

第十一章

「わしにこの程度のミサイルなぞ！」

「効かぬというのか！」

「当然のことだ！」

ヒデヨシはその目を見開いて言い放つ。

「そしてだ。我が奥義の一つ」

「来るか」

博士はヒデヨシの今の言葉を聞いてまた述べた。

「奥義でか」

「左様。豊臣流古武術の一つ」

「何だよ、それ」

「初耳だよ」

ライゾウとタロはまたヒデヨシの言葉に突っ込みを入れた。その闘いを見守りながら。

「それを今ここで受けてみよ」

「面白い。それでは見てやろう」

博士も不敵な笑みと共に返す。

「御主のその奥義とやらをな」

「よかろう」

ヒデヨシもその言葉を受けたのだった。

「それではだ」

「おおっ！？」

「遂に！？」

ライゾウとタロが驚きの声をあげる。すると。

ヒデヨシは両手首を付け根のところでは合わせそのうえで開いていた。そうしてそこから黄金の光を放ったのだった。

「超時空波動砲！！」

「むっっ！！」

「これを受けて生きていた者はおらん！」

博士に対して告げた言葉だ。

「そのからくりごと消え去るがいい！」

「博士！」

「悪が消え去るのかよ！」

「まさかこのベルサイユで！」

小田切君達が思わず声をあげた。それはまさに究極奥義であった。光は一直線に飛びカイザージョーの胸を貫かんとしていた。その光の速さは到底巨体のカイザージョーのかわせる速さではなかった。光がカイザージョーを直撃した。辺りを黄金の光で包み込む。しかしそれが消え去った時には。何とカイザージョーは無傷でそこに立っていた。

「ちっ、無傷かよ」

「案外しぶといんだね」

ライゾウとタロはカイザージョーが無傷なのを見て苦々しい声をあげた。

「折角面白いことになると思ったのによ」

「何ともないみたいだね」

「ちよつと待った」

小田切君はその彼等に対して問うのだった。

「君達はまさか博士が敗れることを期待しているのかい？」

「っていうか一度敗れてそこから立ち上がるのがヒーローものの王道じゃねえかよ」

「そうじゃない、やっぱり」

彼等は能天気な調子でこう小田切君に返すのだった。

「だからなんだけれどさ」

「駄目かな」

「若し博士が敗れたら僕達元の世界に帰れないかも知れないんだけれど」

小田切君は顔を顰めさせてまた彼等に対して告げた。

「それでもいいの？」

「ああ、それは安心していいぜ」

「何時でも帰れるからね」

しかし彼等は落ち着いて小田切君にまた返した。

「そんなの何時でもよ」

「小田切君が不安になることはないよ」

「またそれはどうしてなんだい？」

小田切君は顔を顰めさせたまま再び彼等に問うた。

「何時でも元の世界に帰られるって。どういふことなんだい？」

「ほら、これ」

「これがあるからなんだよ」

彼等はそれぞれ自分の右足で首輪を指し示してみせた。その首輪を見せながらまた小田切君に対して語るのであった。

「この首輪はタイムマシンでもあるんだよ」

「だから僕達は何時でも元の世界に帰れるんだ」

「そんなこと今知ったけれど」

小田切君も驚く衝撃の事実であった。

「一体何時の間に？」

「あれっ、言わなかったか？」

「この前言ったけれど」

彼等はしれっとした調子で小田切君に話してきた。

「ついでに言えばさ、小田切君の左手のその時計もさ」

「タイムマシンなんだよ。知ってた？」

「そんなの知ってるわけないじゃないか」

小田切君はまた顔を顰めさせて彼等に言葉を返すのだった。

「僕の腕時計がタイムマシンだった？」

「そうだよ、博士が改造したんだよ」

「小田切君がお昼にお皿洗ってる間にね」

「そんなの三十分もなかったけれど」

小田切君は首を捻らざるを得なかった。

第十二章

「そんな短い時間でタイムマシンなんか作ったんだ、博士は」

「そういうこと、だから小田切君もさ」

「必要な時は何時でも帰ることができるから」

またしてもわかる衝撃の事実であった。博士もまた時空を移動する術を知っているのである。だが博士ならば、とも思えるから不思議ではある。

「不安になることはないからさ」

「じつくりと腰を据えて見ていようよ」

「ううん、そんなものなんだ」

腕を組んで難しい顔をするしかなかった。

「それだったら」

「ああ、そういえば博士はよ」

「どうしたのかな」

とりあえず自分達の身の安全を小田切君に告げてからまた話すラ
イゾウとタロだった。

「死んでるとは思えないけれど」

「少しはダメージ受けたかな」

「ああ、全然平気みたいだよ」

しかしここで小田切君が上を見上げて難しい顔をしていた。

「ほら、相変わらずカイザージョーの上にいるよ」

「ああ、本当だ」

「確かにいるね」

見てみれば確かにその通りだった。博士は健在だった。相変わら
ずマントを風になびかせてそのうえでカイザージョーの左肩のこ
ろで仁王立ちしていた。

「ふはははははは、流石は超時空天下人だけはあるわ」

「無事なのじゃな」

「無敵無敵！」

博士は両手を腰の横に置きそのうえで高笑いを浮かべていた。

「この程度でわしを倒すことは適わぬわ！」

「ふむ。あの光は十里四方を焼き尽くすだけの力があるのじゃがな」

「十里つてどれだけあるんだよ」

「一里が約四キロだよ」

小田切君がライゾウに説明する。

「だから大体四十キロ位だね」

「じゃあ殆ど原爆じゃないかい？」

「そんな威力があるんだ」

「そうだよ。だからかなり問題なんだよ」

また呆れた声で話す小田切君だった。

「そんなの放ったんだ、あの人」

「けれどカイザージョーは無傷だよ」

タロがこのことを指摘する。

「そうなんだよね。あのマシンって一体何なんだろう」

「原爆クラスのダメージを受けても無傷かよ」

「殆ど化け物じゃない」

「あの博士の作ったものだからかな、やっぱり」

小田切君はこんなことも言った。

「びくともしないのは」

「さて、ヒデオシよ」

博士は不敵そのものの笑みでまたヒデオシに対して言ってきた。
た。

「その程度で終わりではあるまい。違うか？」

「無論じゃ」

そしてやはりそうなのだった。

「わしはこの程度ではじゃ。終わりはせん」

「やはりな。それではじゃ」

「あれ、また話が動いた？」

「そうみたいだね」

ライゾウとタロは二人のやり取りを見て言うのだった。

「さて、どうなるのかな」

「また時代を移るのかな」

「そうかもね」

小田切君はとりあえず彼等に答えた。

「けれどまあ。タイムマシンがあるからね」

「なっ、安心できるだろ？」

「何があってもね」

「まあね。あの博士は」

ここで博士もちらりと見る。

「何があっても生きてるだろうしね」

「ああ、大丈夫大丈夫」

「心配ないよ、博士は」

実際に二匹もこう言うのだった。

「宇宙空間から帰って来る人だよ」

「それこそ。ブラックホールの中に幽閉しても」

「帰って来るだろうね」

容易に想像できることであった。

「多分ね」

「そうだよ。だから心配しないでいいよ」

「僕達は見てるだけでね」

「いいというのである。」

「だからさ。ここはさ」

「遠くから見守っていいよ」

「下手に何かできるわけでもないしね」

最早怪獣映画の決戦になっているからだ。それでどうにかこうにかできるような状況ではないことは小田切君もよくわかってい
るのだった。

第十三章

「もうね」

「さて、それじゃあ」

「次はどの時代かな」

ライゾウモタロもそちらに頭を切り替えていた。

「恐竜とか出たら怖いよな」

「その場合はどうしようかな」

「恐竜で済むかなあ」

小田切君はもつと怖い考えに至っていた。

「だってさ、博士だよ」

「ああ」

「もつと酷い時代になるかも知れないんだね」

「海の中で巨大な岩みたいいな魚に襲われるとか」

遥かな太古の海である。アノマロカリスよりも後だ。

「他にはさ。恐竜が絶滅した時の大異変の時とか」

「何か碌な時代じゃねえな、それって」

「そんな時代に行ったら流石にすぐに死んじゃうね」

「そんな時代に送られるかも知れないよ」

顔を曇らせて言う小田切君だった。

「ひよつとしたらね」

「そうなんだよなあ、何せあの博士だからな」

「あの二人は平気だろうけれどね」

そのどんな時代でも平気な二人は。対峙したまま不敵な笑みを浮かべ合っていた。そうしてそのうえでまたお互いに言い合っていた。

「面白い、それではだ」

「次の時代だぎゃ」

「ああ、いよいよだな」

「変な時代だったら逃げよう」

「そうしようか」

小田切君はライゾウ、タロとここでも話すのだった。

「じゃあ何時でも逃げる心積もりをして」

「すぐにね」

「よし、それで博士」

小田切君が博士に声をかける。

「何処の時代に行くんですか？」

「ああ、気の向くままじゃ」

返答は博士らしいこれまたとんでもないものであった。

「気の向くままに何処かに行くぞ」

「何処かにつて」

「何、心配するな」

心配していないのは博士と相手のヒデヨシだけである。小田切君は気が気でない。とりあえず常識に留まっているメンバーとそうでない人間かどうかすら怪しい二人とではあまりにも違い過ぎた。博士にしろヒデヨシにしろ人間の限界を遥かに超えていた。

「わしは何時でも戦える」

「わしもじゃ」

やはり二人は平然としたものだ。

「例え絶対零度であっても一兆度の炎の中でも」

「わしは死ぬことはないぞ」

「それ地球じゃないよな」

「絶対にね」

ライゾウとタロは今の二人の言葉を聞いてまた顔を見合わせて言い合った。

「そんな世界何処にあるんだよ」

「何処かの異次元空間じゃないの？」

「さて、移動じゃ」

「そこでまた勝負じゃ」

まず二人が何処かに消えた。カイザージョーごと。

そして次に小田切君達だった。不思議な七色の光が一行を包み込む。

「いい時代だといいな」

「その可能性は低いけれどね」

この状況でもライゾウと夕口はお喋りをする。

「本当にね、何処かな」

「本当に恐竜の時代とか？」

「その時代だったら。いいかい？」

小田切君は光に包まれながら彼等に対して言うのだった。

「すぐに元の世界に帰るよ」

「そうだよな。命あつてのことだからな」

「それはね」

「だからだよ。じゃあいよいよだけれど」

遂に完全に光に包まれた。

「行くぞ、覚悟を決めてね」

「おうよ」

「とりあえずはね」

こうして彼等はタイムスリップに入った。そうしてやって来た場所は。

第十四章

「あれっ、ここって」

「何処なんだ？」

まずライゾウとタロは周りを見回した。

「ええと、おいら達何かグラウンド？にいるよな」

「しかも円形の」

とりあえずそれはわかったのだった。

「で、周りは」

「何か上の方まで席があつて人が一杯いるよね」

「おいら達を取り囲んで？」

「しかもあの服って」

彼等はそれぞれ言う。しかしまだ状況が飲み込めていない。しかし小田切君はその席に座る人達の服を見て言うのだった。

「ここってさ。まさか」

「あれっ、知ってるのか？」

「何処なの、小田切君。ここって」

「コロシウムだよ」

こうライゾウとタロに答えるのだった。

「ここはね」

「コロシウム!？」

「あのローマの!？」

「うん、間違いないね」

また答える小田切君だった。

「ここはね。ほら、観客席の人達を見て御覧よ」

「ああ、そつえばな」

「あの服は」

紛れもないローマの服だった。男は丈の短いスカートにサンダルであり女は丈の長いスカートである。中にはトーガを着ている者も

いる。それはどう見てもローマのものであった。

「だよなあ。ローマ帝国だよな」

「じゃあやっぱりここはコロシウムなんだ」

「うん、間違いないよ」

小田切君の返答は変わらなかった。

「コロシウムだよ、ここは」

「また何でこんなところに来たんだ？」

「タイムスリップにしろ。コロシウムの中だなんて」

「さてね。そこまではわからないけれど」

流石にどうしてコロシウムの中に来てしまったかまではわからない小田切君だった。もっと言ってしまえばわかる筈もない話であった。

「とにかくさ。問題はだよ」

「おいら達がコロシウムの中にいるってことだよな」

「そうなんだよな」

ライゾウとタロもこのことに気付いた。そして当然ながらコロシウムにおいては何をするのかということもまた知っているのだった。

「おいら達が剣闘士と闘うってのかい？」

「それか猛獣と？」

「若しくは処刑とかね」

小田切君の予想は彼等のものよりも遙かに悲観的なものであった。

「ほら、ローマ帝国の時代ってキリスト教徒をコロシウムで猛獣の餌にしていたじゃない」

「おいおい、じゃあおいら達が餌かよ」

「冗談じゃないよ、それって」

ライゾウとタロは餌と聞いてすぐにその目を顰めさせた。

「餌になる位ならよ、とつとと逃げるぜ」

「他の時代に行こうよ」

「そうだね。逃げた方がいいね」

小田切君も彼等の意見に頷くのだった。

「じゃあ。すぐにでも」

「おうよ、それじゃあよ」

「すぐにね」

彼等は一実際にそれぞれの首輪や腕時計に前足や手を当てた。そうしてすぐに自分達でタイムスリップしようとする。しかしその時だった。

「待て」

不意に観客達の中でとりわけ豪華な緋色の服を着た男が言った。その頭には月桂冠がある。

「あの者達は何だ？」

「さあ。迷い人と思われませんが」

「あのような者達が本日の催しに出るなどとは」

「そうか。ではただの馬鹿な連中だな」

男は周りの言葉を聞いてこう判断したのだった。

「ではだ。すぐに観客席にやっつてしまえ」

「はい、それでは」

周りの者達が彼の言葉に従いすぐに小田切君達のところに来た。

そうして声をかけるのだった。

「ああ、その君」

「あっはい」

人が来たのを見てライゾウとタロは黙った。そうして普通の猫と犬になるのだった。

「おかしな猫に犬を連れてくるが今日の催しにはエントリーしてないね？」

「ええ、まあ」

小田切君は素直にその言葉に答えた。

「その通りですけれど」

「じゃあすぐに観客席に行きなさい」

小田切君の話聞いて穏やかに告げるのだった。

「適当な席は案内するからね」

「そうですね」

「パンも用意しよう」

ロシアムでは無料でパンが配られた。だから市民達の人気の高かったのだ。無料で何かを食べられること程人気が出るものはない。

第十五章

こうして小田切君達は観客席の一つに案内された。そうしてそこに座って催しを見ることになった。小田切君達はパンを貰いそれを食べながら催しがはじまるのを見るのだった。

「とりあえずさ、何が行われるんだろうな」

「僕達じゃないのはよかったけれど」

ライゾウとタロはさっきまで自分達がいたその闘技場を見て言うのだった。

「この観客のボルテージの高さ見たら相当派手なことが行われるらしいけれどな」

「一体何だろうね」

「やっぱり剣闘士達の戦いかな」

小田切君はパンとそれとポケットに適当に入っていたダイアで買ったワインを飲んでいた。なおこの時代のワインは水で割ってそのうえで飲んでいる。当然小田切君達もだ。

「まだ誰も出て来てないけれどね」

「まあどっちにしる血生臭いものなんだろうな」

「僕そついうのはあまり好きじゃないけれど」

ライゾウもタロもあまり見たくはなさそうだった。

「アニメとかだったらよかったのにな」

「恋愛ドラマとかね」

「そついうのはこのコロシムではやらないね」

小田切君もあまり面白くなさそうな顔をしていた。

「あくまで派手な殺し合いとか戦いだよ」

「やれやれ、じゃあ場所変えないか？博士探す為にもさ」

「このパンとワインお腹の中に入れ終わったら」

とりあえずお腹の中に入れておくものは入れておくことにするライゾウとタロだった。

れた。そうしてそのうえでコロシアムの中央に降り立ったのであった。

「破壊と滅亡を司る天才科学者天本破天荒、ここに見参！」

「何だ！？巨人族の者か！」

「確かにでかいぞあの男！」

「人としてはな！」

ローマ市民達は彼の姿を見て言う。実はこの時代ローマ人達は小柄だった。ジュリアスシーザーは一八〇程度あったがこれはかなり大柄だったのだ。博士は同じ程ある為結果として彼等から見ればかなり大柄になるのだ。

「どちらにしろ神ではないな」6

「邪悪な者だ」

「間違いない」

誰もが直感的にそのことを悟っていた。

「あの黒と白の服の男、一体」

「破壊と滅亡の神なのか」

「何かさ、全然外れじゃねえよな」

「そうだね」

タロはローマ市民の話の聞いて言うライゾウのその言葉に頷いていた。

「あの博士じゃね。それも当然だよ」

「で、どうなるんだろうな」

ライゾウはまた言った。

「このままよ。大騒動起こすんだろうな」

「それは間違いないね」

そんな話をしているうちに博士はコロシアムの中央に降り立った。漆黒のマントがそのまま翼に見える。まさに破壊と滅亡の翼である。

「さあ、ローマ帝国の市民達よ」

七色のサーチライトに照らされた博士の言葉が続く。

「今こそ見せようぞ、この天本破天荒の素晴らしい発明を！」

「皇帝」

「うむ」

あの緋色の服に月桂冠の男が周りの者の言葉に応えていた。

「ここはやはり」

「あれだ」

彼は言うのだった。

「近衛軍を出せ。いいな」

「はい、すぐに」

すぐにコロシラムにずかずかと槍に盾、それに鎧と兜で武装した兵士達が入って来た。彼等が何者なのかはもう言うまでもない。

第十六章

「ローマの兵士達だね」

「ああ、あれがか」

「レギオンだったよね」

ライゾウとタロは彼等の言葉を聞いて小田切君の言葉に応えた。兵士達は既に博士の周りを取り囲みそのうえで攻撃態勢に入っていた。

「ローマの方陣だよな」

「それを使うのかな、やつぱり」

「いや、相手は一人だしそれはないと思うよ」

小田切君はコロシウムの中を見下ろしながら述べた。

「それはね」

「それはないのかよ」

「じゃああのまま取り囲んで？」

「そうだろうね。槍でね」

コロシウムの中では完全に取り囲むローマの兵士達と取り囲まれる博士がいた。両者の優勢劣勢は素人目では明らかであった。

「行けローマの誇り高き戦士達！」

「魔神を倒せ！」

「容赦するな！」

市民達はローマの兵士達に対して喚声を送る。

「頼んだぞ、それで！」

「行け！」

こう声をかける。そのうえで戦いを見守る。そして皇帝もまた。「どうぞされますか？」

「これだ」

立てた右の親指を下に向けた。

「いいな、これだ」

「わかりました」

殺せということだった。この時代にこの動作が何を意味するのか確立された。コロシムにおいて敗れた相手が生きるか死ぬかは皇帝のこの動作一つにかかっていたのだ。もっともそれは市民達の喚声により決まるもので実際の敗者の生殺与奪権は市民達が持っていた。

市民達のボルテージは皇帝のその動作を見て余計にあがる。

「そつだ、殺せ！」

「このまま殺せ！」

こつ叫んでいく。そして今まさにローマ兵達の槍が博士を貫こうとする。しかし博士はその無数の槍を受けても全く平気な顔をしていた。

「何じゃ、その攻撃は」

「槍を受けても死なない!？」

「馬鹿な、鉄の槍だぞ！」

誰もが鉄で貫かれない博士を見て驚愕していた。

「それで何故死なない!？」

「どうなっているのだ!？一体」

「例えオリハルコンであろうともわしを貫くことはできぬ」

博士は余裕に満ちた声で槍の一本を右手に握った。すると。

それだけで槍は溶けてしまった。赤く焼けてそのうえで消し炭になり消えてしまった。何と博士は触れただけで鉄の槍を焼き尽くしたのだ。

「そしてこつして消し炭にすることも可能なのじゃよ」

「槍を消し去ったというのか」

「やはりあの男魔神か!？」

「少なくとも人間ではないな」

「さて、歴史から見て相手に不足はない」

博士はその右手にあの電気鞭を出してきた。一兆ボルトの高圧電流を放つその鞭をだ。

「行くぞ。遠慮せずともな」

「何かまずい雰囲気だよな」

「そうだね」

タロはライゾウの怪訝な言葉に同じく怪訝な顔で答えた。

「このままいけば博士が大暴れして」

「下手したらロシアム全壊だぜ」

「ロシアムどころじゃないね」

小田切君はそれで済まないと言った。

「あの電気鞭の高圧電流が放たれたらそれこそね」

「何もかもが終わるっていうかな」

「もう全部がね」

「それって歴史が変わるぜ」

「もうロシアムどころじゃないよ」

彼等は小田切君の言葉にいよいよ深刻な顔になる。

「どうするよ、本当に」

「ローマが滅んだら」

「参ったなあ。僕達じゃどうしようもないし」

そもそも博士を止めることは小田切君にも彼等にもできはしない。

「本当にね。どうしたものかな」

「この状況はよ」

「洒落にならないよ」

「案ずるには及ばん」

しかし絶好のタイミングで彼等の後ろから声が聞こえてきたのだ。
「つた。」

「それはな」

「！？この声って」

「まさかっと思っけれどよ」

「来たんですか？この時代にも」

「わしを誰だと思っただきゃ」

尾張弁だった。聞き間違えようのない。

「わしはあらゆる時空を超えて生きる者。左様、どの時代にも姿を現わすことができるのじゃ」

「だからここに来られたんですね」

「そうじゃ。あの男の暴拳はわしが止める」

彼等の横に来ての言葉だ。

「今ここでな」

「ほう、来たか」

博士もまたその声を聞いて観客席を見るのだった。

「やはりな。来たのじゃな」

「わしが来るとわかつていたのじゃな」

「来ない筈がない」

確信していたと言いつ切るのだった。

第十七章

「貴様がな。わしのいるこの時代にな」

「その通りだぎゃ。だからわしは来た」

ヒデオシだった。その礼服姿でコロシアムの観客席に仁王立ちしている。そうしてそのうえで博士を見下ろし言い切るのだった。

「貴様を止める為にな」

「この世界ではそれができるかのう」

「できる」

そこには天下人に相応しい絶対の自信があった。

「わしじゃからな」

「いい言葉じゃ。流石じゃな」

博士も今のヒデオシの言葉は納得した顔で頷くのだった。

「わしと戦うだけはある」

「では行くぞ」

博士を見下ろしながらまた告げた。

「今からのう」

「ではじゃ。御主が相手ならばじゃ」

「何っ!?!」

「空を!?!」

ここは博士は空に浮かび上がった。そうしてそのうえで丁度観客席にいるヒデオシの高さにまであがってきたのであった。

「あれっ、博士空飛べたんですか?」

「おお、小田切君」

博士はここでやっと小田切君のことに気付いたのだった。

「君も来ておつたのじゃな」

「来ておつたのかじゃないですよ」

今の博士の言葉には少し困った顔になる小田切君だった。そしてその顔でまた博士に対して述べるのだった。

「さつきからずつとここにいますよ」

「ふむ。そうじゃったのか」

「そうじゃったのかじゃなくてですね」

また困った顔で博士に話していく。

「ライゾウもタロも一緒ですよ」

「そうだけ、やっぱり博士と一緒にの時代だったよ」

「場所もね」

彼等もまた博士に対して話すのだった。

「まあこれこそが腐れ縁ってやつだろうけれどな」

「それで博士カイザージョーは？」

タロはここであの巨大破壊ロボットのことを尋ねたのだった。

「今見えないけれどどうしたの？」

「そういえばいないな。どうしたんだよ」

ライゾウもまたそのことについて尋ねる。すると返事はこうであった。

「うむ、なおした」

「えっ、なおしたのかよ」

「それで今はないの」

「そうじゃ。気が変わった」

博士の気紛れさがここでも遺憾なく発揮されていた。

「ここは思い切って面白いことをやりたいと思ってるのう」

「面白いことですか」

「この鞭じゃ」

右手に持つその鞭を剣のようにして出す。言わずと知れたその一兆ボルトの高圧電流を放つ電気鞭である。博士のメイン武器と言ってもいい。

「この鞭を使ってやろうと思ってるのう」

「それでカイザージョーをしまったんですか」

「そういうことじゃ」

これでとりあえずカイザージョーのことはわかったのだった。

「これでよいな。説明は」

「ええ。それでですね」

とりあえずカイザージョーのことはわかったが聞きたいことはまだあるのだった。とかく常識外れのこの博士の行動を考えればそれも当然のことであつた。

「どうして空飛べるんですか？」

「だよな。前は車椅子とか使っていたけれどな」

「今回は普通に飛んでるからね」

ライゾウもタロもそこに突っ込みを入れたのだった。

「それ何でなんだよ」

「どうして普通に空を？」

「簡単じゃ。マントに浮遊装置を搭載させてみた」

またしれつととんでもない発明のことを言うのだった。

「それを付けてみたせいじゃよ」

「浮遊装置ですか」

「うむ。ただ車椅子やそんなものに頼って空を飛ぶのもどうかと思つてのう」

だからだというのである。

「それで付けてみたのじゃよ」

「だからだつたんですか」

「そういうことじゃ。かなり快適じゃぞ」

実際に博士は今かなり上機嫌な様子であつた。

「いいものじゃ。自ら空を飛ぶのはな」

「それで博士」

小田切君は博士のその言葉を聞いてからまた問うのだった。

「それはいいですけど」

「うむ。まだ質問があるのか？」

「あのですね。それで今ロシアムなんですけれど」

「そんなことはわかつておるぞ」

それがわからない筈もなかった。

第十八章

「ローマのコロシウムじゃな」

「そうですね。まさかここで闘うつもりですか？」

「コロシウムは闘う場所ではないのか？」

これこそが博士の返答であった。

「じゃからここを選んだのじゃが」

「じゃあやっぱり」

「左様。太閤よ」

「うむ」

「いよいよ今からはじめようぞ」

ヒデヨシと同じ高さになりそのうえで告げた言葉だった。

「それでよいな」

「そうじゃな。それではじゃ」

やはりヒデヨシも受ける。

「今度こそ貴様を止めるぞ」

「何かまたとんでもないことになるんだな」

小田切君は二人がいよいよ闘いはじめようとしているのを見て

少しばかりぼやいた。

「やれやれだよなあ」

「何だ今度出て来た男は」

「また随分と奇妙な服を着ているな」

「全くだ」

ローマ市民達はまた怪訝な顔になってあれこれと話をしていた。

話の対象はやはりヒデヨシに関してであった。もう一方の相手にだ。

「結構小さいのはいいとして」

「あの顔は何だ？」

「そつだな、あの顔だ」

ヒデヨシのその顔を見て話すのだった。

「猿？いや、鼠だな」

「そうだ、鼠だ」

それに似ているというのだ。実際にヒデヨシは主君である織田信長から禿鼠と仇名されていた。李氏朝鮮の使者も彼の目が鼠に似ていると記録に残している。

「鼠そつくりだな」

「おかしな男だな」

「何たわけこと言つとりやー！ーす！」

ヒデヨシは彼等の言葉を聞いてすぐに激怒した。

「わしが鼠だぎゃ！？誰が鼠だぎゃー！！」

「あれっ、怒つたぞ？」

「一応人間らしいな」

「パルティアの方から来たのか？顔が黄色いな」

「そうだよな」⁶

次に彼の顔の色を見て言うローマの市民達だった。

「とりあえずローマの人じゃないみたいだが」

「あんた何者なんだ？そもそも」

「御主等は大秦の者達じゃな」

ヒデヨシはここでかなり古い言葉を出してきた。

「そうじゃな？大秦の者達じゃな」

「大秦つて何処の国だ？」

「さあ」

しかし当の彼等はこう言われても首を捻るばかりであった。

「ここはローマ帝国だけれどな」

「違う国のことか？」

「ふむ、間違いない」

しかしヒデヨシは彼等の言葉を聞いて納得して頷くのだった。

「ここは大秦じゃな。あらためてわかった」

「何かわからないけれど納得してくれたみたいだな」

「ここがローマだつてな」

「うむ、それならばよい」

とにかく一人で納得しているヒデオシだった。これは彼の方からはわかるがローマ市民達の方からは何が何なのかさっぱりわからない話であった。

「ではじゃ。博士よ」

「うむ」

「わしの今度の奥義はこれじゃ」

言いながら両手で印を作ってきた。それは。

「ほう不動印か」

「そうじゃ。不動明王の力を今見せてやろう」

言いながらその背中に紅蓮の炎を燃え上がらせてきたのだった。

ローマ市民達はこれを見ても右に左への大騒ぎになってしまっただった。

「おい、今度は炎だ！」

「化け物か！？それとも何だ！？」

「化け物ではない」

「化け物だよなあ」

「少なくとも普通の人じゃないよね」

またライゾウとタロが話す。

第十九章

「ちよつと以上にな」

「だよねえ」

「これは術じゃ」

「術!？」

「やっぱり人間じゃないのか」

ローマ市民から見ればそうであった。

「あんた、やっぱり」

「人間じゃないのか」

「いい加減にせぬか、わしは人間じゃ」

ヒデヨシ自身はこう主張する。

「嘘ではない」

「じゃあ何で時空を超えられるんですか？」

小田切君はかなり率直にそのヒデヨシに尋ねた。

「普通に超えてますよね」

「うむ」

「道具とか使わずにですよ」

「わしにからくりは不要じゃ」

しかもこうまで言う。

「そんなものはな」

「じゃあやっぱり生身で、ですよ」

「左様」

やはり認めるのだった。

「軽いものじゃ。誰でもできるぞ」

「いや、できませんから」

小田切君は今のヒデヨシの言葉に速攻で突っ込み返した。

「そんなの誰も」

「とにかくじゃ。わしの炎」

ヒデヨシはまた博士に向かって言っていた。

「受けてみるがいい」

「ふふふ、面白い」

博士もまたヒデヨシのその炎を見て不敵に笑う。

「ではわしもじゃ。見よ！」

「なっ、雷！」

「あの鞭から放たれたぞ！」

今度の博士の行動を見てまた叫ぶローマ市民達であった。

「雷を操った！」

「やはり化け物だ！」

「ふふふ、わしを誰だと思っておる」

博士は化け物と言われても不敵な笑みを浮かべるだけだった。その周りに七つの雷が蛇の如くうねり博士のコントロールを待っていた。

「わしは天本破天荒、わしにできぬことはないのじゃ」

「やっぱりこうだよ」

「そうだね」

またここでライゾウとタロが話す。

「何かこの博士の方がな」

「悪役だよな」

「本当にね」

そして彼等の言葉に小田切君も同意であった。

「博士はねえ。これはね」

「どうしようもないっていうかな」

「完璧にマッドサイエンティストだよ」

「さて、それではじゃ」

博士の不敵な言葉がまた出される。

「受けてみるがいい。この雷」

「そちらもな」

やはりヒデヨシも引かない。

「わしの炎、受けるのじゃ」

「ではわしの雷と御主の炎」

「どちらが強いか」

「ここで確かめようぞ」

「さあ、行くのじゃわしの炎よ」

何とコロシアムの上空に無数の火球が現われたのだった。

「空に火の玉が!?!」

「あれがあのおっさんの術か!」

「おっさんではない」

またここで言うヒデヨシだった。

「わしは豊臣秀吉。覚えておくことじゃ」

「やっぱり化け物じゃねえか!」

「炎が来るぞおい!」

ローマ市民達の喧騒は最早音楽に過ぎなかった。

「どうなるんだ一体!」

「この化け物同士の鬨い!」

「行け!」

ヒデヨシがまた叫んだ。

「そしてあの下郎を焼き尽くせ。よいな!」

炎は答えない。そのかわり不気味な唸り声をあげて博士に襲い掛かる。しかし博士はその炎達を見ようとしない。空中に浮かび続けているだけだ。

「あれっ、逃げないのかよ」

「見ようともしないよ」

ライゾウもタロもそんな博士を見て言う。

第二十章

「このままじゃ危ないっていうのによ」

「どうしてなんだろう」

「いや、博士には博士の考えがあるんだ」

だがここで小田切君は彼等に話したのだった。

「ここは絶対にね」

「あるのかよ」

「じゃあ一体何を？」

「あの稲妻を見るんだ」

博士が身に纏っているその稲妻をということだった。

「あれをね」

「あれで炎を防ぐっていうのかよ」

「それじゃあ」

「その通り。博士はそのつもりだね」

既に見抜いている小田切君なのだった。

「どうやらね」

「そうか。また随分と無茶をやるんだな」

「いや、博士だったら普通かな」

彼等は小田切君の話の聞いてまた言う。

「そうか？まあ博士だからなあ」

「それ位はね。もうね」

「そういうこと。あの博士だからそれ位は普通だよ」

これは博士を知っている小田切君だからこそその言葉だった。しかし博士のことなぞ全く知らないローマ市民達はどんな反応をするかという。

「これであの変態爺が死ぬんだな」

「ああ、間違いない」

とりあえず一方が死んでくれることを期待しているのだった。や

はり博士の常識を一切無視したとてつもない生命力のことも知らなかった。何しろ二百億歳だ。

「それであるの一方はあの猿だよな」

「だよな。とりあえず片方が消えてくれればそれでいい」

「生憎じゃがな」

博士はそのローマ市民達の声は聞いているのだった。

「わしはそう簡単にやられる趣味はないぞ」

「いや、やられてくれ」

「是非な」

これがローマ市民達の博士への素直な言葉だった。

「とりあえずあなたは絶対にやばいだろ」

「もう性格がわかったからな」

「わしの如き素晴らしき人格の持ち主を捕まえてそう言うところか」

博士は彼等の言葉には実に不快そうな言葉で返すのだった。

「残念じゃ。ローマの者達はわかっておらんのか」

「まあ趣味が兵器開発に生物兵器開発に人体実験に解剖に破壊活動じゃなあ」

「絶対にまともじゃないよな」

「またしてもライゾウとタロがここで言うのだった。」

「そんな人間何処にいるんだよ」

「完全にマッドサイエンティストじゃない」

「さて、それでは博士よ」

炎達を操るヒデオシがまた博士に対して言ってきた。

「受けよ。そして消し炭になり消え去るのだ！」

「ちよこざいわ！」

一斉に襲い掛かる火の球達に対してここで。その稲妻達を放った。稲妻達は忽ち蛇のように凄まじい独特の動きで火の球達に襲い掛かったのだった。

炎と雷が激突する。コロシウムはそれにより紅と緑の光が激しく

交差することになった。

両者は互いに恐ろしい轟音を轟かせそのうえで散っていく。そして後に残ったのは対峙する博士とヒデヨシ、彼等だけなのであった。

「すげえな」

「ああ」

「こんなのはじめて見たぜ」

ローマ市民達はパンを食べるのも止めて言葉を出す。

「ここまでやるのかよ」

「あの二人、やっぱり人間じゃねえ」

「だよな、どう見てもな」

「ふむ、炎を雷で消したというのじゃな」

「その通りじゃ」

また答える博士であった。

「言っただじやるう？この程度わしにとっては造作もないことじやとな」

「そうじゃな。それは確かにのう」

ヒデヨシもそのことを認めた。

「しかしじゃ」

「しかし？」

「これで終わりではあるまい」

またヒデヨシに問うてきたのだった。

「これでな。まさか終わりではあるまい？」

「無論じゃ」

そしてヒデヨシ自身もそうではないと答えてきた。

「わしはこの程度では終わらんぞ」

「そうじゃな。ではまた見せるがいい」

博士の方から挑発してきた言葉だった。

「新たな奥義をのう」

「では見るがいい」

そして早速また奥義を出してきたヒデヨシだった。今度は。

「フェニックスか!？」

「いや、違う」

またしてもローマ市民達はコロシウムの上を見て声をあげる。

第二十一章

「あれは白い。火の鳥ではないぞ」

「しかしこの熱さは何だ？しかも」

彼等はその鳥を見て話していく。

「あの鳥は。燃えていないか？」

「燃えているのか？」

「ああ、燃えているぞ」

「こつ言い合つのだつた。」

「明らかにな」

「馬鹿な、白い炎だと？そんなものがあるのか」

「ああ、そうだったね」

ここでまた小田切君は気付いて言うのだつた。

「この時代の人達は白い炎は知らないからね」

「確か一番高温だったよな」

「そうだったよね、白い炎が」

「そうなんだ。そんなのこの時代は出せないからね」

小田切君はライゾウとタロにこのことを話すのだつた。

「だから白い炎を見てもわからないんだよ」

「それでか」

「皆こんなに驚いてるのは」

「そういうことだよ。青い炎なんてのも知らないだろうね」

「青い炎？」

それを聞いたローマ市民達は怪訝な顔になった。

「何だそりゃ」

「さつきも白い炎つて言つてたけれどな」

小田切君の話聞いてもやはり首を傾げていた。

「火は赤いに決まってるよな」

「何でそんなものがあるなんて言えるんだ？」

「やっぱりわかってないよな」

「小田切君の予想通りだね」

ライゾウとタロはローマ市民達の話聞いてまた小田切君に言った。

「わかってないよ、本当にさ」

「炎が青かったり白かったりするのが」

「光の三原色でもあるんだけどね」

赤、青、白である。この三色がそのまま光の色になっているのだ。普通の三原色は赤、青、黄色だが光では黄色のかわりに白なのである。

「それもこの当時はつきりわかっていたのかなあ」

「そう思うと色々なものがわかるのって随分後なんだな」

「そうだったんだね」

ライゾウとタロはこのことを知るのだった。小田切君の話から。

「成程なあ、今回は色々勉強になるな」

「そうだね」

そしてやや呑気にこんな話をする。しかし博士とヒデヨシの対決は最早呑気などと言えるような生易しい状況ではなくなってしまっていた。

「どうじゃ。この白い火の鳥は！」

その上空を舞う火の鳥を指し示しながら誇らしげに笑うヒデヨシだった。

「流石の御主といえども防ぐことはできまい。どうじゃ？」

「ふふふ、そう思うか」

しかしであった。博士はそのヒデヨシの言葉に対して極めて不敵な笑みを浮かべてそのうえで対峙するのだった。やはり余裕の顔であった。

「わしが白い炎を防げないと。そう思っておるのだな」

「違うのか？」

「わしの辞書に不可能という文字はない」

ナポレオンそのままの言葉だった。

「それを言っておこう」

「不可能はないとな」

「左様じゃ」

そしてまた誇らしげな言葉を出す。

「では見せようぞ」

「なっ、今度はこれか！」

「また滅茶苦茶じゃないか！」

「さあ、見るのじゃ！」

突如として自分の下に出て来たその巨大なローマの戦艦は水色だった。それは何と氷だった。氷の空を飛ぶ戦艦なのだった。

「このわしの戦艦をな！」

「空飛ぶ戦艦!？」

「そんなものをどうして作ったんだ!？」

「やはり化け物かあの男！」

「ふふふ。褒め言葉を聞くのは気持ちがいい」

最早博士にとっては褒め言葉でしかなかった。その化け物という言葉もだ。

「わしは大気中にある水分を自由に氷にすることが出来る装置も持っておるのじゃ」

「もう何でも発明できるんだな」

「あれで平和や人権への興味が欠片でもあればね」

ライゾウとタロの言葉は今度は醒めたものだった。

「今頃世界は平和になっていたのに」

「そんな発想ないから」

「頭の中に元々ないんだらうね」

小田切君も言う。

「博士の頭の中にはね」

「っていかどんな構造してるんだらうな」

「あの博士の頭の中」

彼等はそのことについて何も思いつかなかった。

第二十二章

「もうやること為すこと無茶苦茶だけれどな」

「一体全体」

「それはあまり考えたくないし想像もしたくないしね」

やはりこの辺りは普通人の小田切君だった。

「あの博士の考えることとかはね」

「だよなあ。何せああいう人だからな」

「常人には想像がつかないしね」

「だからね。こうやって見るしかないよ」

つまり傍観者に徹するということだった。

「ここだね」

「そうだな。じゃあじつくりと」

「大人しく見ていようか」

彼等もローマ市民達と共に戦いの流れを見守る。博士はその巨大な宙に浮かぶ氷の戦艦に乗ったまま悠然と火の鳥に対して向かうのだった。

そしてヒデオシもまた。

「消えた!？」

「まさか!？」

「いや、消えていないぞ」

実は彼もまた宙に飛んだのだった。

「あそこにいるぞ!」

「何っ、今度は空か!」

「飛んだだと!」

「空を飛んだ位で驚くとはのう」

博士は恐ろしい速さで空を舞いながらローマ市民の言葉を聞いていた。

「この程度の術で」

「ふふふ、凡人とは些細なことで驚くものじゃ」

博士もまた彼等の言葉を笑っていたのだった。

「空を飛ぶ程度。造作もないことじゃ」

「その通り。わしにとってもじゃ」

「またとんでもねえこと言ってるよな」

「本当にね」

ここでまたしてもライゾウとタロが話をする。

「空を飛ぶなんてな。生身でな」

「人間技じゃないから」

「まああの二人には普通だからね」

小田切君の言葉はまたしても非常にクールなものであった。

「時空を平気で超えたりできるから」

「さあ、博士よ」

ヒデオシは空を舞いながら博士に対して右手から同時に複数の赤い炎の帯を放ってきていた。今度は帯にして鞭のように動かしているのだ。

「どうする？」

「しゃらくさいのう」

そして博士はそれを右手の乗馬鞭で軽く弾き返していた。

「まさかあの火の鳥は張り子の虎か？」

「そうではないのはわかっていると思うが？」

「ふむ、その通りじゃ」

当然といった口調であった。

「それでは。来るのじゃな」

「如何にも。見るのじゃ」

言いながらその白い火の鳥のところへ移動した。そして。

その背に乗ったのだった。まさに一体化と言ってよかった。

「鳥に乗ったのかよ」

「あの白い炎の鳥に」

「炎で燃えないのか」

ローマ市民達はここにもヒデオシの異常さを見ていた。

「何という男だ」

「まさに魔人だな」

「実際のことを知ったらもっと驚くだろうね」

小田切君にはもうこのことがわかっていた。

「それこそね」

「だよなあ。赤い火よりずっと熱いんだからな」

「それも何千度も熱いんだよね」

「そうだよ」

小田切君はまたしてもライゾウとタロに説明した。

「もうね。燃えるどころじゃないから」

「けれどよ、太閤さんよ」

「全然平気だけれど」

ライゾウとタロはそのヒデオシを指し示して小田切君に告げた。

「あれはどうなんだよ」

「どういった服なんだろう」

「当時のああした礼服は絹だけれど」

小田切君は首を捻りながら述べた。

第二十三章

「当方で最高の素材のね」

「絹って燃えるよな」

「やっぱり服の生地だから」

「うん、燃えるよ」

またはつきりと答える小田切君だった。

「それもかなりね」

「けれどよ。太閤さんよ」

「全然燃えないけれど」

「それがわからないんだよね。何でかな」

やはり小田切君にもどうしてもわからないのだった。

「あれかな。力で炎が自分を燃やすのを防いでいるのかな」

「何かそれ聞いただけで物凄い力だよな」

「伊達に時空を自由に行き来できるんじゃないんだね」

やはりそういうことだった。

「それだけのものがあるんだ」

「そういうことだね。とにかくあの人は平気だよ」

燃えないしその熱気にも平気で火の鳥の背に座している。その姿は神々しくすらある。神に見えないこともない。かなり異質の神ではあるが。

「全くね」

「そしてそれに対するのは」

「あの博士だね」

「さて、どうかね」

小田切君はここで何度目かの難しい顔を見せるのだった。

「それこそ八千度位はある炎だから。下手な温度じゃ対抗できないけれどね」

「炎には氷みただけれどな」

「それだけかな。果たして」

「博士だからね」

殆ど説明不要といわんばかりの小田切君の今の言葉だった。

「氷だけじゃないかもね」

「じゃあ何を仕掛けてくるんだろうな」

「何かな」

「そうだね。火といえば」

小田切君はまだ考えはじめた。

「あれかな」

「あれって？」

「まさかそれって」

「うん、あれね」

今はあえてその単語を出さないかのようだった。

「あれを出すかなって思うんだけど」

「そういえばそうだよな」

「火が相手だしね」

ライゾウもタロもそれで納得するのだった。

「何かどちらにしるな」

「また壮絶な戦いになるみたいだね」

「そうだね。コロシム本当に大丈夫かな」

小田切君はそれがかなり不安になってきたのだった。

「本当に破壊されなかつたらいいけれど」

「何でそんなにコロシムにこだわるんだい？」

「何かあるの？」

彼等は困った顔をする小田切君に対して尋ねた。

「ここってそんなに大事な場所なのかよ」

「ただイベントとかをする場所じゃなかつたっけ」

「確かに大事だしイベントをする場所だよ」

彼等の言葉をそれぞれ認める言葉だった。

「けれどね。それだけじゃないんだ、ここはね」

「それだけじゃないって」

「やっぱり何かあるんだ」

「言い伝えだけれど」

「こう前置きはする。」

「あれなんだ。コロシウムある限りローマは存在する」

「この言葉を彼等に述べるのだった。」

「そう言われてるんだよね」

「コロシウムがある限りローマは存在する」

「そんな言葉があるんだ」

「そうなんだ。そうした言葉があるからね」

「ふうん、だったら若しコロシウムがここで潰れたら」

「若しかしたらローマも」

「言われてるだけだよ」

決め付けは避けている。しかしそれでもであった。小田切君の言葉にはそうした歯切れの悪い、何か混ざったようなものがあるのも確かであった。

そしてその歯切れの悪い混ざったような言葉で。また言うのだった。

「それでも。気になる言葉だよな」

「だよなあ。何か」

「預言みたいだな」

「預言は預言だけれど」

「この預言についても否定はするのだった。」

「僕は信じない方だけれど」

「不安にはなるよな」

「そうだね」

所謂預言というものの厄介な点である。例え信じていなくとも不安にさせたりもする。やはり心の何処かに引っ掛かるものが生じてしまうからである。預言もそれはそれで毒があるのである。

第二十四章

「じゃあここはどうもなんだな」

「不安ってわけだね」

「うん。そうじゃなくてもあの二人がそのまま全面衝突すれば本当に」

「ローマ崩壊も本当にあるよな」

「この時代のローマが」

「それだけで歴史はかなり変わる可能性があるよ」

ローマはローマ帝国の心臓である。その心臓が壊滅すればローマ帝国自体に多大な影響が出てしまう。それがひいては歴史にも影響を及ぼす恐れがあるのである。ローマは当時の欧州を支配している超大国だ。そのローマが揺らげば周辺の異民族やパルティアといった敵对国家、それに皇帝に対して不穏なものを抱いている地方総督達がどう動くかわからないからである。それがローマの、それに続く後世の歴史を変えてしまう恐れがあるのである。

「だからね」

「この闘いを放置しとくと危険なんだな」

「けれどさ」

しかしなのだった。彼等が言うのは。

「止められないだろ？あの二人は」

「それこそ特撮のヒーローでもない」と

「無理だね」

小田切君も実にはっきりと答える。

「それこそ。巨大ロボットでもないとな」

「だよなあ。やっぱり困ったな」

「どうしようか」

「どうしようもないしね」

もうこれだけははっきりわかっているのだった。そもそも普通に

自分達で時空を超越できたりどんなものでも発明できるような者達を止められることなぞ到底不可能なのである。例えライゾウやタロが話すことのできる動物だとしてもそれだけでしかないからだ。

「あんなの。白い炎に」

「氷の船って」

「あの船にしる」

小田切君は少し鋭い目でその氷の船を見ていた。

「ただの氷の船じゃ絶対じゃないね」

「そりゃ空飛んでるしな」

「どう見てもね」

それはライゾウにもタロにもよくわかった。しかしそれ以上になのだった。

「けれどそれ以上にかよ」

「あの船にはまだ何かあるんだ」

「もう洒落にならない位の猛火に対するには」

その白い炎にである。

「普通の氷じゃ無理だからね」

「そもそもあの博士が普通の氷なんてな」

「それ自体が考えられないことだしね」

博士のことを知っていて少し考えればなのだった。答えは自然と出る。あの博士に普通というものが全くないことは最早常識だからだ。

「じゃあやつぱりよ。あの氷の船はよ」

「またまた洒落にならないものなんだ」

「さて、どう洒落にならないものかな」

小田切君はまた首を捻りながら述べた。

「果たして」

「それすらわからないんだからなあ」

「一体何が出て来るやらね」

「そうなんだよね。冗談抜きで壮絶なものが出て来るのは間違いな

いけれど」

それだけははっきりと言えた。

「果たして何が出て来るかね」

「さて、それではじゃ！」

その時またしても博士が叫んだ。

「この氷の矢を受けるがいい！」

「ふむ。氷の矢か」

「左様。見よ！」

叫び声と共に、であった。船から無数の弓矢が何処からともなく放たれたのだった。当然その無数の弓矢はヒデオシと火の鳥を狙っている。

氷の無数の矢がヒデオシ達を襲う。小田切君はその矢を見て咄嗟に言った。

「そうか、あの矢は」

「どうしたのかよ、あの矢が」

「あそこに秘密があるんだね」

「あるね」

小田切君は弓矢達をそのまま見据えながら答えた。

「あの弓矢はね」

「ああ」

「何があるの？」

「普通の氷じゃない」

最早それは断言であった。弓矢達はそのまま飛んでいてヒデオシも火の鳥も今まさに貫かんとしていた。その弓矢達をじっと見ているのだ。

第二十五章

そうしてであった。小田切君はそこに見ていたのだった。弓矢の秘密を。

「氷は溶けるよな」

「ああ、それはな」

「元は水だしね」

ライゾウにとってもタロにとっても今更といった言葉だった。普通に言葉を返す。

「んっ！？そういえばよ」

「あの氷って」

ここで彼等も遂に気付いたのだった。

「全然溶けないぞ」

「何で？炎に近付いているのに」

「それなんだよ」

小田切君が見ているのはそこなのだった。

「ほら、全然溶けていないじゃない」

「だよなあ、本当に」

「普通の氷なら絶対に溶けるどころか蒸発する温度なのに」

「だからただの氷じゃない」

またそこを指摘した。

「そうだね。あれは」

「あれは？」

「どんな氷なの？それで」

「絶対零度の氷だよ」

それだと言ったのであった。ここでもやはり断言であった。

「あれはね。絶対零度の氷だよ」

「絶対零度の氷か」

「それを放ったんだ。博士って」

「そつだよ。あれならまず溶けない」

絶対零度ともなればだ。それこそ生半可な炎では溶けたりはしない。博士はヒデオシが白い炎を出してきたのであえてそれを出したのである。

「博士だからこそできることだね、あれは」

「悪い意味で、だけれどな」

「同感」

タロは相方のライゾウのその言葉に頷いた。

「あんなことばかりできるのつてよ」

「絶対零度なんてそう簡単に実現できないからね」

「さて、その絶対零度の弓矢だけれど」

小田切君は冷静に見続けていた。闘いの成り行きを。

「果たして白い炎に効くかな」

「おのれ、只の氷ではないと思っていたが」

「やっと気付いたようじゃな」

ヒデオシの顔に歯噛みするものが浮かんできていた。そうしてそれは正反対に博士の顔は満面の笑みだった。勝利を予感していることがわかる。

そのうえでだった。博士はさらに弓矢を放つ。それと共に叫ぶ。

「止めじゃー！」

「おのれ、まだ撃つというのか！」

「わしの辞書に容赦という言葉はない！」

他にも色々な人間として必要な文字が欠落している博士であった。

「それは知っている筈だがな」

「知っているが覚えるつもりはない」

ヒデオシも堂々と言い返す。歯噛みしている顔ではあるがそれでも負けている顔ではないのだった。

「それは言っておく」

「言わなくてもよい」

博士も博士でそんな言葉を聞くつもりはないのだった。

「こつちも聞くつもりはないからのう」

「左様か。それではじゃ」

「また仕掛けたぞ、あの猿顔！」

「今度はあれか！」

ローマ市民達の絶叫の中で火の鳥は羽ばたいた。それと共に放ってきたのは無数の白い羽根であった。それを無数のロケット弾のようにして放ってきたのだ。

「氷の矢に炎の矢」

「その衝突なんだね」

「うん、これはどうなるかわからないな」

小田切君もライゾウとタロに対して述べた。

「どっちが強いかっていうとね」

「それであれだろ？どっちかが強かったら」

「その衝撃でロシアムは」

「うん、完全に崩壊するね」

実に簡単に導き出された答えであった。

「その衝撃でね」

「じゃあれかよ。完全に衝撃が中和されないと」

「ロシアムは崩壊するんだ」

「ついでにここにいる人達も」

勿論ロシアムが崩壊すればそこにいる彼等も無事では済まない
のであった。これはもう当然のことであった。

第二十六章

「何万人も一度にね」

「やっぱり無茶苦茶だよな」

「だよな」

彼等はそこまで聞いてまた言うのであった。

「そこまでするってさ」

「博士しかいないけれどね。そんな人は」

「とにかく。大変なことになるよ」

小田切君はその二人の対決を見続けていた。氷と炎の対決を。

白と白がぶつかり合う。すると忽ち凄まじい轟音と衝撃が発生した。

衝撃は幸い上に向かった。しかし火の鳥は全く動じていない。

しかしその轟音は特別だった。雷なぞ想像もできない音が場を支配した。

「何なんだ。この音は」

「五月蠅いなんてものじゃないぞ」

ローマ市民達はまた啞然とした声をあげる。だがその轟音はその声もかき消してしまう程凄まじく彼等の聴覚をも破壊しかねない程度だった。

小田切君達も耳栓をして黙って闘いを見守っている。だがその氷と炎の激突も終わり残っていたのは生憎と片方だけではなかった。

どちらも生き残っていた。そのまま宙に浮かび続けている。まるで何もなかったかのように。平然とそこに生き続けているのであった。

「やっぱりしぶといな」

「死ぬとは思っていなかったけれどね」

ライゾウもタロもかなり残念そうであった。

「まあとにかく。コロシウムは無事だったな」

「巻き込まれた人もいなかったしね」

とりあえずそれには安堵した。しかしそれだけではなく博士もヒデオシも。ここで誰もが想像もできないことをやりだすのであった。「どうやらここでも決着はつきそうにないのう」

「そうじゃな」

勝手に自分達で納得してしまうのだった。

「では場所を変えるぞ」

「よし、それではじゃ」

こうして彼等は時代も場所も変えることにした。彼等はそのまま時空を超えにかかるのだった。最早常識というものを完全に無視してしまっていた。

「次の時代でこそじゃ」

「決着をつけようぞ」

そして実際に何処かに消えてしまった。後には何も残ってはいなかった。しかもローマ市民達も完全に取り残されてしまっていた。

「何だったんだ今のは」

「さあ」

「何かとんでもないのを見たけれどな」

「化け物だったのか？ やつぱり」

彼等には理解できないものではあった。しかしそれが消えるともう現実に戻っていた。ローマ市民達もかなり強いものがある。

「では次はだ」

「はい」

またその月桂冠を頭に飾り緋色の衣を着た男が周りの者に命じていた。

「とりあえず歌手に歌わせろ」

「わかりました」

こうして歌手が呼ばれて歌う。小田切君達もとりあえずタイムスリップをしてローマを後にした。そうして次にやって来た時代は。

粗末なバラックの店が立ち並び。そこにはこれまた粗末な身なり

天本博士はその男の断末魔の声を聞きながら言つのであった。

第二十七章

「ここも中々よいものじゃ」

「この爺生きてやがったのか！」

「死んだんじゃなかつたのかよ！」

その人相の悪い男達は博士を見て叫ぶ。

「何でここにいるんだよ！」

「五月蠅いから消えるのじゃ」

やはり素っ気無く恐ろしいことを言う博士だった。

「さらばじゃ」

「あぐげあぐげかながいあまおにかー！ー！ー！ー！っ！！」

「すばーばっく！！」

博士の鞭から放たれる一兆ボルトの高圧電流の前に彼等は一人残らず消し炭になってしまった。しかし勿論博士にとってそんなことは小石をどけたものでしかない。

彼等を全員地獄に送ってからであった。そのうえで周囲を見回すと偶然彼等がいた。

「ああ、博士ここにいたんですか」

「運よく出会えたよな」

「そうだね」

小田切君だけでなくライゾウとタロもいた。彼等もこの時代に来ていたのだ。

「まさかこんなにすぐ出会えるなんてな」

「こつちの世界に来てすぐだからね」

「たまたまこの世界にしたんですよ」

小田切君はこう博士に説明するのだった。

「そうしたら博士がいたんですから」

「人には縁というものがあるのじゃよ」

博士はその小田切君の言葉に応えて述べた。

「じゃからな。こうして出会うのも当然じゃ」
「縁ですか」

「うむ。縁がなければ会うこともない」

博士はまた縁というものについて話した。

「そういうものじゃからな」

「じゃあおいら達博士と縁があるんだな」

「そうなるよね」

ライゾウもタロもその結論に達しざるを得なかった。

「だとするとな」

「やっぱりどんな時代に行っても博士と一緒になるのかな」

「そうじゃな。一緒になる」

博士は彼等に対しても答えるのだった。

「縁があればな」

「まあ出会えてよかったですよ」

小田切君はとりあえずそれはいいとした。

しかしだった。今しがた博士が消し炭にしたその不逞な者達の軀を見て。怪訝な顔で尋ねるのだった。当然彼等はもう全員事切れていた。

「この連中は一体」

「ふむ、この連中はな」

今しがたその電気鞭で一蹴した軀達を見ての言葉だ。軀達は風がひひーひひーと吹くとそれだけで消え失せてしまった。後には何も残らなかった。

「終戦直後に暴れていた三国人共じゃ」

「三国人ですか」

「そうじゃ。知っておるか？」

こう小田切君に対して尋ねるのだった。

「三国人のことは」

「何か終戦直後に暴れていた連中ですよね」

小田切君は博士に応えて述べた。

「戦前、戦中日本だった領土の人達が独立してそう呼ばれるようになったとか」

「何か微妙な呼び方だよな」

「そうだね」

ライゾウとタロは二人の話を聞いてまた彼等で話をした。

「何でそんな呼び方をしたんだ？」

「その辺りが気になるけれど」

「戦勝国でも敗戦国でもないからだよ」

小田切君がその彼等に説明してきた。

「だからね。第三の立場の国々の人達ってことで三国人って呼ばれたんだ」

「ああ、それでか」

「それでなんだ」

彼等は小田切君の話を聞いてそれで納得した。

「それで三国人か」

「成程ね」

「この連中は勝手に戦勝国の人間と称してこのようにやりたい放題やっておった」

博士はこれまで彼等がいたその空間を見ながらまた説明してきた。

「当然わしの研究所にも雪崩れ込んで来たのじゃよ」

「それでどうしたんですか？」

「決まっておろう。全員実験材料じゃ」

小田切君の問いにあっさりと答える博士であった。

「そんなことは当然じゃ」

「当然ですか」

「そうじゃ。当然じゃ」

やはり博士にとってそんなことは何でもないことであった。誰を実験材料にするのも気に入らない相手ならばどうということはないのである。

第二十八章

そしてその考えで。こうも言うのだった。

「さつきも好き勝手やっておつて気に入らんかったからな」

「それで電気鞭で、ですね」

「一瞬じゃった」

まさに一瞬で皆殺しにしたのである。

「最初の一人は特別に一人に電流を流してやったがのう」

「一兆ボルトの電流をですね」

「他愛もない」

人命は何とも思っていない。もつとも勝手に戦勝国民と称してやりたい放題をしていたのだから成敗されても当然と言えるが。これ後にあれこれと理由をつけて自分達を被害者と自称するのならばそれはもはや人ではなく餓鬼道に堕ちた輩のすることである。

「威張つておつたのにその程度じゃった」

「その程度ですか」

「まあこのような連中のことはどうでもいい」

とりあえずこの話は終わらせることにしたのであった。

「それでじゃ」

「はい。やっぱりこの時代にも太閤がいるんですよね」

「あの男はわしとの決着を望んでおる」

博士はそのことがよくわかつているのだった。

「この時代のこの国に必ずおる」

「必ずですね」

「そうじゃ。場所は」

「ここで場所についても考えを巡らせるのであった。

「あそこじゃな」

「あそこといえますと?」

「あそこといえばあそこじゃ」

これまたかなりわかりにくい表現であった。

「あそこにおるのじゃ」

「あそこだけでわかつたら凄いやな」

「説明になってないよ」

ライゾウとタロの突っ込みも道理であった。

「だからあそこって何処なんだよ」

「固有名詞出してもらわないと」

「大阪城じゃよ」

そこだというのである。

「そこにおる。あ奴はな」

「大阪城ですか」

小田切君も場所を聞いて真面目な顔になった。

「そうですね。太閤といえばあそこですからね」

「あの城にはあ奴の全てがある」

博士はこうまで言うのであった。

「ならばじゃ。あそこでわしが来るのを待っておる、絶対にな」

「じゃあ今から大阪城にですね」

「うむ。早速な」

行くというのであった。

「向かうがじゃ。一緒に行くか？」

「そうですね」

小田切君は博士のその申し出を聞いてまずは考える顔になった。

そうしてそのうえでまずはライゾウとタロに顔を向けて尋ねるのであった。

「どうしよう」

「いいんじゃないかねえのか？」

「僕もそう思うよ」

彼等は賛成の言葉を出してきた。

「もつさ。行きたいんならよ」

「行ったらいいと思うよ」

「そうじゃな。それではじゃ」

彼等は博士だけで勝手に行くと思つていたしそうあるべきだと考へていた。しかしであつた。それは実に甘い考へであつた。まだ博士のとんでもなさがわかつていなかつたのだ。

「すぐに行くぞ、よいな」

「あれつ、すぐつて」

小田切君は今の博士の言葉からあることを察したのであつた。

「今の言葉の感じですよ」

「君達も来るのじゃろう？」

当然だといわんばかりの言葉であつた。

「大阪城に。そうじゃな」

「大阪城つて言われましても」

小田切君はそれを聞いて思いきり怪訝な顔をするのだつた。

「あの、そもそもここ何処なんですか？」

「そつだよな。闇市らしいけれどな」

「何処なんだろう」

ライゾウもタロもここが何処か全くわからないのだつた。何しろ彼等はこの時代の日本に今来たばかりなのである。これでわかる筈もなかつた。

第二十九章

「関西か？」

「さあ。何処だろうね」

「何か食べているものもあれだし」

小田切君は目を凝らしてバラツクの粗末な屋台の中の料理を見た。見ればそれは残飯か何かで作ったらしいシチューとすいとん、あと林檎等が売られていた。

「あれじゃあちよつとわからないよ」

「方言これ何処のだ？」

「標準語じゃないのは間違いないね」

ライゾウとタロは耳を凝らした。

「何だ？たいとかばってんとか」

「そんなこと言ってるけれど」

「ここは博多じゃ」

博士はこう彼等に対して答えた。

「博多じゃよ、ここは」

「ああ、ここが博多か」

「豚骨ラーメンとかガメ煮の街だよね」

ライゾウとタロは博多といえればそれであった。

「だからか。屋台が多いのは」

「明太子あるかな」

彼等はいくまで食べ物を探す。しかし博士は今はそのようなものには一切構わなかった。それよりもまずはヒデヨシとの決戦であった。

「そんなもんは元の時代に戻ってからじゃ」

「ちえっ、今じゃねえのかよ」

「面白くないなあ」

「そもそも君達香辛料とか調理具加强いの大丈夫なの？」

小田切君が気になったのはこのことだった。

「そういえば」

「ああ、そんなのは大丈夫なんだよ」

「喋れるようになった時にそういうのも変わったからね」

「ああ、そうだったね」

小田切君も彼等の言葉からこのことを思い出したのだった。

「だから君達平気だったんだ」

「やっぱりキャットフードがいいんだだけだな」

「僕はドッグフード」

この辺りはやはり猫と犬だった。だから好みはどうしてもそれに準ずるものになっていた。

「まあそれは元の時代に戻ってからだな」

「そうするか」

何だかんだでそれで頷く彼等だった。

「それで博士、博多から大阪にですけれど」

「これに乗るのじゃよ」

何時の間にか何処からかあの車椅子を出してきていた。空を飛び無数の武器を内臓している恐るべき車椅子である。

「これに乗ってすぐに行くぞ」

「一人乗りですけれど」

小田切君はその車椅子を見てすぐに述べた。見れば確かに座席は一つしかない。考えてみれば車椅子だから当然のことではあるが。

「それに乗るんですよね、僕達も」

「それは幾ら何でも無茶だろ」

「そうだよな」

ライゾウもタロも常識の観点から語っていた。

「おいら達は絶対に乗れないぜ」

「それで大阪までって」

「安心するのじゃ」

しかし常識を一切無視する博士は大胆不敵にもこう言い切るのであつた。

「これをポチツと押すとじゃ」

「はい」

小田切君は思わず博士が車椅子の左の肘掛のところにあるボタンの一つを押したのを見てそれに相槌を打った。するとだった。

車椅子がいきなり変形した。何処からか二本足が出て来て巨大な二足歩行のマシンになったのだ。車椅子の席はそのままにやはり何処からか機首が出て来て肘掛が両腕になった。アメリカ映画に出て来るようなガウオークタイプのマシンになったのであった。

「さあ、これに乗るのじゃ」

「どうやってこんな形に変形したんだ？」

「今凄い形になったけれど」

ライゾウもタロもその異常な変形をしてガウオークになった車椅子を見て述べた。

「サイドカーがサイド　シャーになるのはわかるけれどよ」

「これは幾ら何でも大きさが合っていないじゃない」

「大きさや内蔵する武器なぞどうともなるのじゃよ」

だが博士にとってはそんなものは考慮するまでもないことであつた。

「知能指数二十万のわしの前にはのう」

「まあそれに乗って大阪までですか」

小田切君はとりあえず常識のことは考えずに博士に応えた。

「今から行くんですね」

「その通りじゃ。では早く乗るのじゃ。後部座席もあるぞ」

見れば博士の後ろにしっかりと席があつた。人間用の席がだ。

「そこに動物達も入れるのじゃよ」

「シートベルトをちゃんとしてだよな」

「そつだね」

彼等はかなり安全志向でもあつた。

「それで行くか」

「大阪までね」

「よし、じゃあ乗ろう」

小田切君は早速彼等をその両手に抱いた。するとそのマシンが右手で彼等を器用に抱えてそのうえで後ろにやってくれたのであった。

第三十章

「では行くぞ」

「はい」

シートベルトをしてからそのうえで旅立つ。マシンは超音速で空を飛び一瞬で大阪城まで辿り着いたのであった。まさに一瞬であった。

「さて、到着じゃ」

「えっ、もうですか!？」

小田切君は気付けば到着していたのでまずは啞然となった。

「今乗ったばかりですけど」

「このマシンはマツ八四で飛ぶことができるのじゃよ」

博士はまたまた誇らしげに言つてのける。

「無論乗つてる者にはバリアーで防御もされるから衝撃や重圧からは安全じゃ」

「そうなんですか」

「当たり前じゃ。さもないとわしも吹き飛ばされる」

そのことを警戒していることであつた。

「そうなつては元も子もあるまい」

「確かにその通りですね」

小田切君もそれには素直に頷くことができたのだつた。

「操縦する人があつてのことですからね」

「その通りじゃよ」

「そうですね。それにしても」

小田切君はライゾウ、タロと一緒に地面に降り立った。そうして大阪城の周りを見回すがその有様を見て思わず顔を顰めさせたのであつた。

「これはまた随分と」

「酷いな、これは」

「天守閣はかろうじてあるけれど」

ライゾウもタロも顔を顰めさせる。見れば見えているのは天守閣だけであり他には何も見えはしない。瓦礫の山だけが広がっているというとんでもない有様であった。

「何、これ」

「そんなに酷い爆撃を受けたの？」

「この辺りは確か軍需工場があつたからね」

小田切君は歴史の知識を振り返りながら彼等に述べた。

「だから集中的な爆撃を受けたんだつたよ」

「左様。アメリカ軍はついでにわしの研究所も爆撃しようとしてきおつた」

博士も狙われていたのであつた。

「日本で東条英機に匹敵する悪とか言われてのう」

「それで研究所もB - 29に襲われたんですか」

「頭に来たからレーザービームで全部撃ち落としてやった」

この時から異常な科学技術を持っているのだった。

「何度か来おつたが遂に諦めおつたわ」

「この博士には原爆でも無理だよな」

「今の技術でも絶対に倒せないしね」

まさに不死身、不滅の博士であつた。これまた人類にとって全くいいことはない事柄である。何しろ地球を破壊しかねない人物が不死身だからだ。

「そんな人間が不死身なんてよ」

「物凄い災厄じゃない」

「災厄！？何時聞いてもいい言葉じゃ」

そしてこれは博士にとって褒め言葉なのであつた。

「わしは永遠の災厄じゃ。全てを破壊するのう」

「まあそれはいいですけど」

とりあえず小田切君は廃墟の中に何とか生き残っている天守閣を見ながら博士に対して言うのだった。天守閣はあの青い瓦に金の鯨

を見せていた。

「博士、太閤が来ていますよ」

「むっ!?!」

「ほら、あそこに」

指差したのはその天守閣の頂上であった。二匹の鯨の間にあの彼が仁王立ちしていたのであった。それはまさに覇者の姿であった。

「いますよ、ちゃんと」

「ふむ、そこにおったか」

「来たか、我が強敵よ!」

ヒデオシもまた大音声で博士に対して告げてきた。

「待つておったぞ!」

「待たせて悪いとは思わん」

博士の辞書には謝罪という言葉も存在しない。謝罪する位ならそもそも趣味で生体実験なぞ行ったりはしない。だからこそマッドサイエンティストなのである。

「全くのう」

「わしもまた謝罪して欲しくもない」

そしてそれはヒデオシもなのだった。

「そんなものは一銭の価値もないものじゃ」

「この辺り時代が出るよな」

「そうだね。一銭だからね」

ライゾウとタロは今の博士の言葉からそういつことまで読み取ったのだった。

第三十一章

「安土桃山時代の人だけはあるよな」

「その時代を拠点にしてるんだね、やっぱり」

「さて、ここで決着をつけようぞ」

ヒデオシはまた博士に告げてきたのだった。

「それでよいな」

「よかるう」

博士はその変形した巨大車椅子の上に腕を組んで立っていた。そのマントが風にたなびきバタバタと音を立てていた。

「行くぞ、よいな」

「それではじゃ」

ヒデオシはその両手をゆっくりと大きく左右にあげた。すると天空に突如として暗雲が立ち込めてきたのであった。それは実に不気味な雲であった。

その雲が瞬く間に空を覆い尽くした。するとその雲から次々に無数の落雷が降り注ぐのであった。

「何っ、落雷！」

「おい、危ないって！」

「これは流石に洒落にならないよ！」

小田切君だけでなくライゾウもタロも驚きの声をあげる。

「このままじゃ。死ぬぞおい！」

「早く避難しないと！」

「そうだ。こういう時は」

小田切君は咄嗟にその左手の時計を見た。その時空を自由自在に行き来できる時計である。その時計はそれだけではないのであった。

「これを使って」

「時計をか！？」

「それを使って元の時代に戻るの？」

「うっん、ここはね」

彼等に応えながら時計のあるボタンを押した。するとそこからビニールハウスが出て来た。そして忽ちのうちに小田切君達を覆ったのであった。86

「これでよし」

「これってシエルターか？」

「ひょっとして」

「そうだよ。ビニールだから雷は通らないし」

小田切君は自分の側に来ている彼等に答えた。

「しかも特別のビニールだから熱も無効化するしね」

「へえ、そりゃ凄い発明だな」

「じゃあ雷もこの中にいれば」

「そう。安心だよ」

また彼等に対して答えた。

「何かあってもね」

「よし、これで安心して戦いを見ていられるな」

「落雷の音は凄いいけれど」

そればかりはどうしようもなかった。話をしているこの時点も落雷が豪雨の如く落ちてきている。特殊ビニールのシエルターがなければとても生きていられないものであった。

彼等はその落雷から身を守りながら戦いの流れを見ていた。落雷は博士の周りにもひっきりなしに落ち博士を車椅子ごと破壊せんとしていた。

しかし博士はその中であっても。全く動じるところはなかった。

そうしてそのうえで言うのであった。

「ふむ、面白い演出じゃな」

「面白いが」

「雷は神の裁き」

神話においてはよくそう考えられている。ギリシア神話ではゼウスが、北欧神話ではトールがそれぞれ使うまさに神々の必殺の武器

である。

「まさに演出に相応しい」

「ただの演出だと思っっているのか？」

「如何にも」

博士の不敵な言葉はここでも健在であった。

「雷程度でわしを倒せると思っっていたか」

「このわしの雷でも倒せんというのか」

「むしろ倒せると思っっておったのか？」

逆にヒデヨシに問い返しさえした。

「この程度の術で」

「こんなに雷落とすのがこの程度かよ」

「相変わらず滅茶苦茶な博士だな」

またしても呆れるライゾウとタロであった。やはりこの博士は雷程度では倒すことができないのだった。非常識なのにも程があると言える。

「しかしそんな化け物をどうするんだ？」

「どうやって退治するんだらう」

彼等はむしろ博士の方を悪者と見ているのであった。

「雷で駄目ならな」

「他に何か方法があるかな」

「さあ。どっちも物凄い変人だからね」

小田切君は彼等を変人と言い切ったのだった。

「もうね。何をやってても不思議じゃないから」

「つまり何が起こっても不思議じゃないってことだな」

「そうなるよね」

彼等がしでかすことが起こってしまうからだ。日本語と言うものは実に便利な使い方ができるものである。少なくともあの二人を的確に言い表すことはできた。

第三十二章

「さて、どうなるかな」

「そうか。雷で無理ならばだ」

言いながらもまだ空を暗雲で多い雷を落とし続けているヒデオシだった。それは最早下手な爆撃よりも恐ろしいものになっていた。

「今度はこれじゃ」

「何を出すつもりじゃ？」

「風よ、吹き起これ」

言いながら今度は風を起こしてきた。それはただの風ではなくまさに台風であった。雷が効かないと見て台風を起こしてきたのであった。

「台風！？今度はそれかよ」

「えらく小型の台風だけれどね」

しかし台風は台風である。しかもその威力は。

「うわ、小さいけれどもあの台風凄いよ」

「どれだけの強さなんだ？」

「それであの台風は」

ライゾウとタロはヒデオシが己の前に出したその台風を見ながら小田切君に問う。見れば小田切君はかなり狼狽したような顔になっている。

「伊勢湾台風の倍はあるよ」

「えっ、あの関西を大混乱に陥れたっていうあの台風かよ」

「あれの倍だつて!？」

「そうだよ。それだけの威力があるんだよ」

小田切君は相変わらず天守閣の頂上で仁王立ちしそのうえで台風をその前に出している超時空天下人を見て言うのであった。

「あの台風は」

「よくそんな台風出したもんだよ」

「また随分滅茶苦茶なことやるね」

「滅茶苦茶なんて言葉あの二人の辞書にはないしね」

そもそもそんな言葉すらないのであった。彼等の中には。

そうしてビデオシはその小型だが凄まじい威力の台風を放った。

台風はこれまた凄まじい衝撃音を響かせながら博士に襲い掛かってきたのであった。

「さて、博士よ」

「これに対してどうするかじゃな」

「そうじゃ。どうするのじゃ？」

「何、簡単なことじゃ」

博士はその車椅子のガウオークの座席で仁王立ちしたまま言葉を返すのだった。

「わしのこのマシンでろう」

「我が無敵の台風を潰すともいいうのか？」

「その通りじゃ。この車椅子一つで惑星を破壊することも可能じゃ」
まさに核兵器以上の凶悪な兵器なのだった。

「そんな台風程度ろう」

「何処をどうやったらそんな車椅子ができるんだ？」

「無茶苦茶な話がどんどん続くね」

ライゾウとタロはここでまた呆れてしまったのだった。

「何か物凄いマシンだけれど」

「どうなるのかな。本当に」

「受けてみるがいい。リアレールガン」

これまた現代の技術では到底開発できない兵器であった。

その言葉と共に両手のそれぞれの砲口に光が宿る。それは左右にそれぞれ三つずつ、合計六つある。その全てに光が宿ったのである。そうしてマシンは空中を上下左右に激しく動きながら攻撃に取り掛かってきた。激しい動きをしながらも狙いは正確であった。

「見るがいいわ！」

博士はマシンの上に仁王立ちしたままだった。

「この車椅子の力をのう！」

「いや、もう車椅子じゃねえからそれ」

「何なのかな、本当に」

ライゾウとタロの言葉こそ正論であった。

「何か両手からビームを次々に放ってるけれどよ」

「だからあれがレールガンらしいよ」

「それがか。あれがかよ」

「自衛隊にもあんな技術ないけれどね」

ある筈もないものだった。博士だからこそ持っている技術である。

「それをどんどこ撃ってるよな」

「台風をどんどん撃ってるけれど」

狙いは正確だった。一発も外しはしない。無数の攻撃を受けてさしもの台風もその動きを止めてきた。そうして遂に消え去ってしまったのだった。台風が消える時は実に呆気なくまさに雲散霧消であった。

その消えた台風を見てヒデヨシはどうしたかという。特に何もなかった。

「ふむ。消えたか」

「言った筈じゃ。どうということはない」

またしても言い切ってみせる博士であった。

「この程度のものではのう」

「わしの生涯の強敵だけはあるだぎゃ」

なおこの場合強敵と書いて『とも』と呼ぶのである。

第三十三章

「褒めてやるだぎゃ」

「わしに認められるものは賞賛だけじゃ」

まさに悪の科学者の言葉であつた。

「それを今言つておくぞ」

「しかと聞いたぎゃ。それでは」

「次はわしの番じゃ」

博士が不敵な笑みを浮かべてみせてきた。

「見るがいい。わしのマシンの攻撃を」

「やはりレールガンだけではないのじゃな」

「勿論じゃ。やるがいい」

マシンに対してかけた声であつた。

「その地獄の攻撃で今こそあの太閤を大阪城ごと消し去ってしまうのじゃ」

「つておい」

「大阪城も巻き込むの!？」

ライゾウとタロはまた博士の言葉に突っ込みを入れるのだった。

「それはやつたら駄目だろ」

「そうだよ、折角空襲から生き残つたのに」

「博士だからね」

しかしこの言葉で説明充分なのだった。

「破壊が趣味だからな」

「何してもおかしくないじゃない」

「そうなんだよなあ。困つたことに」

小田切君の声は実際に困り果てたものになっていた。相変わらずビニールのシエルターに入ったままである。そのうえで戦いを見守っていた。

「大阪城が。このままじゃあ」

「大阪城は壊せん」

そしてヒデヨシが大阪城を守ろうとしていた。その大阪人の心の支えをだ。

「世の為人の為、させん、させんぞ！」

「ふははははははははは、そうは言っても形あるものは必ず壊れるものよ！」

完全に悪役の博士であった。

「それを今見せてやろうぞ！貴様自身を倒してのう！」

「ではそれを退けてみせるわ」

両者はこれまでになく激しく対峙していた。

「わしのこの全身全霊の力でのう！」

「ではやれ、車椅子よ！」

このガウオークに名前はなかった。

「そのミサイルであの太閤を天守閣ごと吹き飛ばしてしまえ！」

そうして車椅子から夥しい数のミサイルが放たれたのだった。優に千発はあった。

「何処にあんなミサイルがあつたんだ？」

「さあ」

どう見ても内蔵量の限界は超えているのでライゾウモタロもまた言うのだった。

「あれだけの数のミサイル一度に放つなんてな」

「そうだよな。あんな小さな車椅子の何処に」

「しかもだよ」

そしてまた小田切君がここで言うのであった。

「ミサイルのそれぞれが凄く動きしてるし」

「確かになあ」

「凄いね」

見ればミサイルのその一発一発もそうであった。それぞれが複雑な動きを見せそのうえでヒデヨシに対して向かっているのだった。それはまるでイリュージョンであった。物騒だがそれでいて美し

い。ヒデオシは今その無数のミサイルを前にしているのである。
ところが彼は。至って平然としていた。

「よけんのか？」

「よけるまでもない」

相変わらず堂々と立っている。

「わしのこの超時限バリアーを今見せてやるっぞ」

「バリアー！？」

小田切君はバリアーと聞いて声をあげたのだった。

「そんなものも出せるんだ、やっぱり」

「やっぱりかよ」

「当然だっというんだね」

「まあ今までの物凄い行動を見ていればね」

小田切君もそれを納得しているのであった。

「普通にやりそうだし」

「まあ白い炎なんて出すしな」

「カイザージョーとも互角に戦ってたし」

ライゾウにしるタロにしる納得せざるを得なかった。

「バリアー位は朝飯前か」

「やっぱりね」

「さて、そのバリアーだけねど」

小田切君はそのバリアーについて言及する。

「大阪城を守りきれるかな」

「どうだろうな」

「壊れても不思議じゃないけれど」

流星に千発のミサイルを受けては大阪城といえど無事では済まない。というよりは一発でも浴びれば危ないのも言うまでもなかった。

第三十四章

「太閤様防いでくれるんだらうな」

「期待してるけれど」

「このミサイルを全て防げると思っておるのか！」

しかし博士の悪役そのものの台詞が続いている。

「千発を超えておるのじゃぞ」

「千発でも二千発もじゃ」

「三千発じゃぞ」

「では三千発でもじゃ」

さりげなく突っ込みと訂正が行われた。

「このわしのバリアーにはミサイルなぞ効かん！」

「ふははははははははははは、どれもただのミサイルではないぞ！」

博士の非常識な言葉がまだ出るのだった。

「全てが核ミサイルじゃ。驚いたか」

「驚いたも何もどんだけ滅茶苦茶なんだよ」

「あれ一機で核ミサイル三千発!？」

ライゾウもタロも今回は空いた口が塞がらない。

「世界破壊できるじゃねえかよ、本当に」

「博士って嘘だけは言わないんだ」

「さて、どうやって防ぐのじゃ」

その無数のミサイルが大阪城に迫る中で博士の高らかな言葉が続く。

「これだけの核ミサイルを全て」

「むう……」

「バリアーもただのミサイルなら防げよう」

博士はそこを指摘する。

「しかし核ミサイル。しかも三千発じゃ」

戦略潜水艦が百隻あってもまだ及ばない数である。

「防げる筈がないわ！一発で終わりじゃ！」

「終わらぬ！」

だがヒデヨシはそれだけのミサイルを前にしても同じであった。

「この程度。たかが核ミサイルでわしを倒せると思うておるだぎゃ
！」

「ほう。では見せてみよ」

博士はガウオークの座席に腕を組み立ったままである。

「そのミサイルの防ぎ方をのう」

「見よ！」

ヒデヨシが己の胸の前で合掌してみせた。

「超絶霸道！神速裂光！」

いきなりその身体から凄まじい光を発したのだった。

そうしてその光が辺りを包み込み。あの三千発の核ミサイルが全
て消え去ったのであった。残ったミサイルは一発もなかった。

「この通りじゃ」

「御主の最大奥義の一つか」

「まだまだあるがのう」

ヒデヨシは不敵な笑みと共に博士に応えた。

「じゃが今はこれを使ったのじゃ」

「そうか。しかしじゃ」

だがここで博士はヒデヨシを見て言うのだった。

「それだけの技を使えば只では済むまい」

「ふむ。わかつていたのか」

「三千発の核ミサイルを宇宙まで飛ばしそのうえで爆発させる」
瞬間移動させたうえでそうさせたのである。

「それだけのことをすれば只では済むまい」

「その通りじゃ」

そしてヒデヨシもそれを認めるのであった。

「その力がそのままわし等に加わりじゃ」

「ふふふ、面白いのう」

博士の知能指数二十万の頭脳はそれを聞いただけで何が起ころのかわかってしまった。

「ではまた新たな時代に移るのじゃな」

「その通りじゃ。ではその時代に行こうぞ」

「楽しみにしてのう」

言いながら彼等は姿を消したのであった。とりあえず大阪城は無事であった。

残されたのはまたしても小田切君達であった。彼等はシェルターから出てそのうえで顔を見合わせる。そうしてそのうえで話をするのであった。

「どうする？」

「どうするって。もう博士もいないし」

まずはライゾウとタロが顔を見合わせて話をする。

「時代も場所も変えるしかないんじゃない？ やっぱり」

「そうだよな。ここは」

「そうだね。何かこれ以上ここにいてもね」

ここで小田切君が彼等に話す。

「仕方ないしね。帰ろうか」

「帰るのかよ」

「何かどうでもよくなったの？」

「いや、何となくだけれどね」

こつ前置きしてからまた話す小田切君だった。

「そこに博士がいるような気がするからね」

「そうだよな。何かそんな気がするよな」

「あの博士のパターンからね」

「だから帰ろう」

あらためて彼等に提案するのであった。

第三十五章

「元の時代の大阪にね」

「よし、じゃあそうするか」

「そこにいてもおかしくないしね」

彼等もそれに頷く。そうしてその首輪に腕時計に手を触れてそのうえで時空を超えるのであった。そこから辿り着いたその場所は。

やはり元の時代であった。彼等はそこに戻って来た。その彼等が見たものは。

「あれっ、やつぱり」

「ここにいたんだな」

見れば博士がいた。大阪城の前に。タイムスリップする丁度その前と同じ状況で。彼はあのヒデオシと対峙していたのであった。

「ふむ。今回もどうやら」

「引き分けのようじゃな」

そして彼等の間だけで自己完結していた。

「見事な術じゃったぞ」

「そちらこそな」

「何か勝手に終わったな」

「そうだね」

そんな二人を見てライゾウとタロが話をした。

「どうする？これで終わりか？」

「みただけけれど」

「まあそれでいいんじゃないかな」

小田切君の言葉はかなり投げやりなものであった。

「それじゃあもうそれで」

「そうだよな。幸い実害はなかったしな」

「そうだね」

ライゾウもタロもこれで納得するのだった。

「それならこれでいいか」

「色々あつたけれどね」

とりあえずこれで終わって欲しかった。これが本音である。

そうして終わろうとしたその時だった。博士が言うのであった。

「それではじゃ」

「何じゃ？」

「わしは気が向けばまたこの街に来る」

こう言うのである。

「よいな。また来るからのう」

「来るつもりか」

「左様。楽しみに待っておれ」

高らかに言うのであった。

「その時をな。それでどうじゃ？」

「よかるう」

そしてヒデヨシもそれに応えるのであった。

「何時でも来るがいい」

「そうか。その言葉覚えておくぞ」

「わしは何時いかなる場合でもじゃ」

ヒデヨシの宣言はさながらどこかの魔性の闘魂を持つ天才レスラ

―であった。

「どのような相手の挑戦も受ける」

「それはわしもじゃ」

これは博士も同じなのであった。

「そして徹底的に叩き潰す」

「その通りじゃな」

またしても顔を見合わせて互いに言い合つのであった。

「それは次じゃ」

「次こそは御主を倒すぞ」

またしても互いに言葉をかけていく。

「よいな。それではじゃ」

「今はこれで別れようぞ」

「こう言葉を交えさせてそのうえで別れた。博士はヒデヨシに背を向けるとそのまま立ち去っていく。そうして小田切君達の方に歩いてきて言うのであった。」

「さて。それでじゃ」

「はい」

小田切君がその言葉に応える。

「帰るぞ」

「帰るって研究室にですか」

「他の何処にそうした場所があるのじゃ」

かえってそう聞き返すのであった。

「ないじゃろ。違うか」

「まあそうですね」

言われてそれで納得する小田切君だった。

「それについては」

「では帰るぞ。よいな」

「帰るのはいいんですけど」

小田切君はそれはいいとした。しかしまだ言いたいことはあるのだった。

第三十六章

「何か忘れてませんか？」

「何かとは？」

「はい。何か忘れてませんか？」

「こう博士に対して尋ねるのであった。」

「何か」

「はて」

「だがとう問われても首を傾げる博士だった。」

「何かあったかのう？」

「覚えてませんか？」

「わしは些細なことは忘れるからのう」

「実に自分にとって都合のいい頭脳である。」

「じゃからなあ」

「そうですね。実は僕もなんですよ」

「そして小田切君も忘れてしまっているのだった。」

「何かここに来たのに理由があったような」

「何だった？」

「いや、僕もちょっと」

ライゾウもタロも覚えていないのは同じであった。彼等にしろ何でここに来たのかさえも覚えていないのであった。しかも全く、という言葉までつく。

「何だった？」

「ちょっと記憶が」

「そうだよ。何だったかな」

「彼等もどうしても思い出せなかった。誰も思い出すことができなかった。」

「そして博士もまた。ここで言うのだった。」

「さて、パエリアでも食べるとするか」

「博士の好物のあれですね」

「うむ。料理はまずはスペインじゃ」

これが博士のこだわりであった。料理とワインに関してはかなりのこだわりがあるのが彼なのである。他にもイタリア料理が好きだったりする。

そのスペイン料理を食べたいと言いながら博士は今。大阪城を出た。

その後ろにはまだヒデヨシがいた。しかし彼はもう後ろは振り向かなかった。

「引き分けじゃな」

「引き分けですか」

小田切君は博士のその言葉に対して突っ込みを入れた。彼にしるライゾウとタロにしるもう大阪城を出ていた。やはり振り向くことはなかった。

「今回もな。しかし次はこうはいかんぞ」

「ってまだやるんですか」

「機会があればのう。じゃがそれは今ではない」

まさに幸いにして、であった。世界と人類にとって。

しかしだった。それでも博士は言うのだった。まるでピクニックに行くような表情で。

「今度はあれを作るうか」

「あれっていいいますと？」

「あの県のマスコットじゃな」

博士の脳裏にまたしても不吉なものが宿るのだった。

「あれを巨大ロボットにしてみるかのう」

「今度は巨大ロボットですか」

「他にはあれじゃな」

博士のとんでもない構想は巨大ロボットだけには留まらないのだった。それだけで終わるような博士ではない。これもいつものことである。

そしてその恐ろしい構想を胸に今。博士は言った。

「戦闘員の様に人間程度の大きさのロボットを作ったのう」

「何かまたとんでもないこと考えてるんですね」

博士の常なのでこれはすぐに察することができた小田切君だった。しかしそれ以上はというと。とんと予想がつかず。彼は首を傾げながら言うのだった。

「それで今度は何を」

「世界を火の海に変えてやろう」

実に何でもない口調で洒落にならないことを言ってみせる。

「さて、今から楽しみじやのう」

「やれやれですね」

最早博士を止めることもない小田切君だった。超時空天下人ヒデヨシとの戦いは今回はとりあえず引き分けで終わった。しかし博士の全人類、地球規模での恐ろしい行動はなおも続くのだった。そしてこれは誰にも止められるものではなかった。残念なことに。

決戦！！天本博士VS超時空天下人ヒデヨシ

完

2009・7・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5783h/>

決戦！！天本博士VS超時空天下人ヒデヨシ

2010年10月8日14時18分発行